

# 井伏鱒二著作年表稿（昭和7年～8年）

前田 貞昭

## 凡例

1. 本年表稿は、先に「井伏鱒二著作年表稿」と題して発表してきた著作年表<sup>(1)</sup>を受けて、昭和7～8年に発表された井伏鱒二の著作（座談会などを含め、井伏鱒二の署名で発表されたもの）を網羅することを目的としたものであり、初出誌紙（もしくは初出単行本・叢書）の発行月日（奥付などの記載による。同一日付の場合は印刷納本日付の順）の順に従って、現物未確認のものも含め、調査しえた限りものを掲出した。
2. 初出についての各事項は、標題（本文に付されているものによる）を最初に掲げ、初出誌紙の名称、初出誌紙の巻号（現物の表示が年号等を使用している場合は、それに従った。現物のどこにも巻号の表示がない場合は、編者が仮りに付した巻号を< >に入れて補った。また、現物に表示されている月号・通巻号数等は（ ）内に入れて付記した）、掲載頁、発行年月日（（ ）内に印刷納本日付）、発行所の名称、編集人名（（ ）内に編集人と発行人が異なっている場合のみ発行人名。なお、原則として、発行人・編集人ともに奥付に記載されているものに従ったので、表紙などにうたわれている編集者や実質的な編集者などとは必ずしも一致しないことがある）、価格を記し、< >内に適宜必要な情報を補足した。但し、新聞・週刊誌の通常号は印刷納本日付が記されていないので掲出せず、また、新聞の発行所名・発行人名・価格も省略したが、夕刊については実際の発行日付を（ ）内に入れて示した。なお、単行本・叢書などが初出と推定されるものも、初出誌紙同様にここに掲出しているが、その際、単行本・叢書であることを『 』に括って示し、掲載頁、発行日付（（ ）内に印刷納本日付）、発行所名（（ ）内に発行人名）、価格の順に掲げた。また、筑摩書房増補版『井伏鱒二全集』（元版・1964年9月25日～1965年8月30日、増補版・1974年3月20日～1975年7月28日）未収録のものを中心に、\*の後に、内容に関わる解説を加えた。
3. 座談会・詩・翻訳・アンケート回答などについては、標題のところに\*を付してその旨を記した。
4. 本文の標題に付された副題などは、－で括って示した。
5. シリーズ名・欄名・特集名などで、本文・目次などに表示されていても、副題とはみなしがたいものは、＝で括って示した。＝内の記述は、ほぼ、ジャンル名、シリーズ名・欄名・特集名の順に従い、小さい枠組みから順に記述した。

6. 編者が補ったことばは〈 〉で括り、標題のないものは〈無題〉として掲出した。
7. ( )、【 】は原文にあるものをそのまま生かした。
8. 標題・引用文の表記は、原則として、新漢字・旧仮名遣いに従った。
9. 引用に当たって、新聞などで、文末に読点を使用している場合も初出本文に従ったが、行末の句読点が省略されていると推定されるものは、( )に入れて補った。また、くりかえし符号は、同ノ字点「々」あるいは一ツ点「ゝ」に統一して、二字分以上のくりかえし符号は用いなかった。
10. 初収録の単行本・叢書については、解題のところに記し、筑摩書房増補版『井伏鱒二全集』所収のものは、標題の後に、その収録巻数を丸数字によって示した。さらに、続けて、『井伏鱒二自選全集』（新潮社・1985年10月10日～1986年10月20日）所収のものについても、特に「自」と付した丸数字によってその収録巻数を示した。また、上記全集以外の再録書については、解題で述べた初収録のものも含め、[ ]に入れた番号<sup>(2)</sup>によって再録されている単行本・叢書を示した。その際、主として、永田龍太郎編『井伏鱒二文学書誌〈改訂増補版〉』（永田書房・1985年5月30日）によるとともに、『井伏鱒二自選全集』所収のものについては、同全集補巻所載の松本武夫「書誌」に負った。
11. まえがき等で、『井伏鱒二文学書誌〈改訂増補版〉』に再録されているものについては、標題の後に★を付して示した。
12. 初出誌紙などが不明のものも、今後の調査を待つ意味で掲出し、その情報の出所を記した。その際、発表もしくは執筆年月日が推定できるものは、その推定月（年）の末尾に掲げた。なお、?によって、当該事項が現物（および写真・複製）未調査のため不明であるか、あるいは二次資料などによって推定したことを示した。
13. 何回かにわたって掲載されたものについては、その初回のところに、連載回数・再録書・解題など全体にわたる事項を記した。ただし、短編連作のような形態で、初出標題に連続性が認めにくいものは、一々の箇所です示した。
14. 井伏作品を収載した単行本・叢書の初版初刷については、初出単行本・叢書として掲出したものも含め【 】で示して掲出し、その書誌的事項を記した。但し別人の著書に序文・推薦文等を寄せただけのものについては、再掲することはしなかった。各事項は、単行本・叢書の名称、編者、発行所（( )内に発行人名）、初版初刷の発行年月日（( )内に印刷納本日付）、明記してあるものは発行部数、判型、目次頁数・本文頁数・あとがき頁数（p. の左に置いた数字によって総頁数を示した。また本文頁数には中扉も数えた）等、価格、明記してあるものは装丁・挿画者名、の順に記し、収録作品名（本文に付された標題による）を掲出した。また、合著の場合はできるかぎり各々の作品名・著者名も明示しておいた。なお、その際、初版初刷の現物が見られなかったものについては、◎を付して示した。さらに、単行本・叢書に収録されている作品については、初出誌紙名及び初出年月を、個々の作品名の下に小さく記しておいた。
15. 本年表稿は、前田貞昭・綾目広治・遠藤伸治・藤村猛・丸川浩「井伏鱒二著作年表」（磯貝英夫編『井伏鱒二研究』溪水社・1984年7月10日）の調査をもとに、遺漏・誤謬

を補綴し、より詳細な事項を加えて作成した。『井伏鱒二研究』所収「井伏鱒二著作年表」作成の際には、『文芸年鑑』、小田切進編『現代日本文芸総覧』全3巻補巻1（明治文献・1968年1月25日～1973年8月25日）、永田龍太郎編『井伏鱒二文学書誌』（永田書房・1972年8月20日）、米田清一「解題」（筑摩書房『増補版・井伏鱒二全集』）、大越嘉七編「井伏鱒二作品年譜」（『井伏鱒二の文学』法政大学出版局・1980年9月15日）、涌田佑「書誌及び文献を配した井伏鱒二年譜」（『私注・井伏鱒二』明治書院・1981年1月25日）を調査の基本とさせていただいた。そして、今回は、上記に加え、鳥越信『日本児童文学史年表』2講座日本児童文学別巻2（明治書院・1977年8月25日）、『全集・内容総覧』上下現代日本文学総覧シリーズ1（日外アソシエーツ・1982年6月10日）、『全集・作家名総覧』上下同2（同・1982年7月10日）、青山毅『詩歌全集・内容総覧』上下同6（同・1988年2月20日）、松本武夫「書誌」（『井伏鱒二自選全集』補巻）の調査を利用させていただいた。とりわけ、瀬尾政記『井伏鱒二著作目録稿』（瀬尾瓊子・1988年5月24日）に負うところが大きい。なお、一々すべてにわたって注記しなかったが、上記諸年表と本年表稿との異同は、現物調査の結果、本年表稿において補綴したものである。

## 注

- 1) 「井伏鱒二著作年表稿（昭和16年～20年）」（『岐阜大学教養部研究報告』21号・1986年2月）、「井伏鱒二著作年表稿（昭和14年～15年）」（『岐阜大学教養部研究報告』22号・1987年3月）、「井伏鱒二著作年表稿（昭和14年～20年）補遺」（『兵庫教育大学研究紀要』第9巻2分冊・1989年2月）、「井伏鱒二著作年表稿（昭和13年）」（『兵庫教育大学近代文学雑誌』1990<1号>・1990年1月）、「井伏鱒二著作年表稿（昭和12年）」（『兵庫教育大学研究紀要』10巻2分冊・1990年2月）、「『井伏鱒二著作年表稿』手控え1」（『兵庫教育大学近代文学雑誌』2号・1991年1月）、「井伏鱒二著作年表稿（昭和11年）」（『兵庫教育大学研究紀要』11巻2分冊・1991年2月）、「井伏鱒二著作年表稿（昭和10年）」（『兵庫教育大学近代文学雑誌』3号・1992年1月）、「『井伏鱒二著作年表稿』手控え2」（同前）、「井伏鱒二著作年表稿（昭和9年1月～6月）」（『兵庫教育大学研究紀要』12巻2分冊・1992年2月）。なお、「井伏鱒二著作年表稿（昭和9年7月～12月）」を『兵庫教育大学研究紀要』13巻2分冊（1993年2月）に掲載予定。
- 2) 以下に、その番号、単行本・叢書の標題、発行所、発行年月日、の順に掲げる。なお、現物未調査のものは×を付して示し、初版初刷以外で確認したものは＊を付して示した。

1. 川	江川書房	1932. 10. 20
2. 随筆	椎の木社	1933. 5. 31
3. 逃亡記 文芸復興叢書	改造社	1934. 4. 20
4. 田園記	作品社	1934. 5. 15
5. 肩車	野田書房	1936. 4. 5
6. 静夜思	三笠書房	1936. 8. 15
7. 雞肋集	竹村書房	1936. 11. 15
8. 集金旅行	版画荘	1937. 4. 20
9. 厄除け詩集 コルボオ叢書 7	野田書房	1937. 5. 25 ×

10. 火木土 版画荘文庫 29	版画荘	1938. 1. 20
11. 陋巷の唄 新小説選集 11	春陽堂書店	1938. 10. 15
12. 禁札	竹村書房	1939. 3. 20
13. 川と谷間 創元選書31	創元社	1939. 10. 18 *
14. オロシヤ船 新選名作叢書	金星堂	1939. 10. 20
15. 風俗 随筆集	モダン日本社	1940. 6. 17
16. シグレ島叙景	実業之日本社	1941. 3. 12
17. 四季詩集	山雅房	1941. 3. 20
18. 夏の狐 井伏鱒二随筆全集 1	春陽堂書店	1941. 3. 23
19. 風貌姿勢 井伏鱒二随筆全集 3	春陽堂書店	1942. 2. 18
20. 井伏鱒二集 新日本文学全集 10	改造社	1942. 9. 1
21. 仲秋明月 詩集	地平社	1942. 9. 20 *
22. 仲秋明月 手帖文庫	地平社	1946. 5. 15 ×
23. オロシヤ船	新星社	1946. 7. 10
24. 雞肋集	鷺の宮書房	1946. 7. 12
25. 風貌姿勢	三島書房	1946. 12. 20
26. 夏の狐	三島書房	1947. 2. 15
27. 現代作家選集 秋声文学碑建設記念 上	桃李書房	1948. 1. 10
28. 夜ふけと梅の花 新潮文庫	新潮社	1948. 1. 15
29. 山椒魚 新潮文庫	新潮社	1948. 1. 15 *
30. 詩と随筆	河出書房	1948. 5. 10
31. 悪い仲間 井伏鱒二選集 2	筑摩書房	1948. 6. 20
32. 雞肋集 井伏鱒二選集 3	筑摩書房	1948. 9. 20
33. 架空動物譜 井伏鱒二選集 6	筑摩書房	1949. 2. 25
34. 牡丹の花 井伏鱒二選集 7	筑摩書房	1949. 7. 10
35. 井伏鱒二集	新潮社	1950. 6. 30
36. 遙拝隊長	改造社	1951. 4. 30
37. 厄除け詩集	木馬社	1952. 1. 10
38. 井伏鱒二作品集 1	創元社	1953. 4. 15
39. 純粹の声・風貌姿勢 現代日本随筆選 1	筑摩書房	1953. 7. 20
40. 井伏鱒二集 現代日本文学全集 41	筑摩書房	1953. 12. 20
41. 井伏鱒二・河上徹太郎・中島健蔵集 現代随想全集 22	創元社	1954. 5. 20
42. 源太が手紙	筑摩書房	1956. 1. 30
43. 井伏鱒二・豊島与志雄集 少年少女のための現代日本文学全集 18	東西文明社	1956. 2. 29 ×
44. 屋根の上のサワン 角川文庫	角川書店	1956. 12. 1 ×
45. 井伏鱒二集 中学生全集 24	新紀元社	1957. 5. 30 ×
46. 日本の風土記 南九州	宝文館	1959. 9. 25
47. 井伏鱒二集 日本文学全集 32	新潮社	1960. 5. 20

48. 井伏鱒二集 少年少女日本文学名作全集 23	東西五月社	1960. 9.00 ×
49. 厄よけ詩集	国文社	1961. 3.31
50. 井伏鱒二 サファイア版昭和文学全集 16	角川書店	1962. 7. 5
51. 井伏鱒二集 現代の文学 6	河出書房新社	1965.10. 8
52. 堀辰雄全集 10	角川書店	1965.12.20
53. 井伏鱒二集 現代文学大系 43	筑摩書房	1966. 3.10
54. 場面の効果	大和書房	1966.10.15
55. 井伏鱒二 日本の文学 53	中央公論社	1966.11. 5
56. 井伏鱒二集 日本文学全集 41	集英社	1967. 5.12
57. 井伏鱒二 日本文学全集 22	新潮社	1967. 9.15 ×
58. 風貌・姿勢 名著シリーズ	講談社	1967.10. 5
59. わが師わが友 生活の本 1	筑摩書房	1967.11.10 *
60. 井伏鱒二集 定本限定版現代日本文学全集 70	筑摩書房	1967.11. ? ×
61. 井伏鱒二 カラー版日本文学全集 23	河出書房新社	1969. 4.30
62. 井伏鱒二 日本文学全集 15	新潮社	1969.10.30 ×
63. 井伏鱒二集 日本文学全集 43	筑摩書房	1970.11. 1
64. 井伏鱒二 日本文学全集 15	新潮社	1971. 7.20 *
65. 人と人影 現代日本のエッセイ	毎日新聞社	1972. 5. 5
66. さざなみ軍記 名作自選日本現代文学館	ほるぷ出版	1972.12. 1
67. 井伏鱒二集 日本文学全集豪華版 41	集英社	1973. 3. 8
68. 井伏鱒二集 増補決定版現代日本文学全集 70	筑摩書房	1973. 4. 1 ×
69. 井伏鱒二 アイボリーボックス版日本の文学 53	中央公論社	1973. 9. ? ×
70. 井伏鱒二集 筑摩現代文学大系 44	筑摩書房	1976. 5.15
71. 井伏鱒二の自選作品 現代十人の作家 4	二見書房	1976. 6.30
72. 厄除け詩集	筑摩書房	1977. 7.21
73. 井伏鱒二集 愛蔵版筑摩書房現代文学大系 44	筑摩書房	1979.10.18 ×
74. 夏 日本の名随筆 18	作品社	1984. 4.25
75. さざなみ軍記 日本の文学 56	ほるぷ出版	1984. 8 .1
76. 焼物雑記	文化出版局	1985. 1.20
77. トートーという犬	牧羊社	1988. 4.10
78. 人と人影 現代日本のエッセイ 講談社学芸文庫	講談社	1990. 2.10
79. 定本 厄除け詩集	牧羊社	1990. 5.10

なお、現物未確認で永田龍太郎編『井伏鱒二文学書誌<改訂増補版>』（永田書房・1985年5月30日）に掲載されていないものに関しては、以下の記述に基づいて掲出した。『新潮社九十年図書総目録』（新潮社・1986年10月20日）p.485の記述によれば[57]は[47]と同内容。『筑摩書房図書総目録1940-1990』（筑摩書房・1991年2月8日）p.213及びp.220の記述によれば[60][68]は[40]と同内容、同書p.287及びp.291の記述によれば[73]は[53][70]と同内容。

また、[22]は『井伏鱒二文学書誌<改訂増補版>』の記述によったが、1947年2月10日地平社発行配給元鉄道弘済会とするものを確認。

## 付記

本著作年表稿の作成に当たっては、国立国会図書館、日本近代文学館、神奈川近代文学館、阪急学園池田文庫、大阪府立中之島図書館、神戸市立中央図書館、彦根市立図書館舟橋聖一記念文庫の資料を利用させていただき、その際多方面からの御助力を賜った。兵庫教育大学附属図書館情報サービス係、岐阜大学附属図書館参考調査係の利用者サービスによって、各種の資料利用・複写ができた。また、山内祥史氏、林眞氏、佐藤嗣男氏、館上敬一氏に資料や情報を頂戴した。感謝申し上げる。

どんな些細なことでも、お気付きの点があれば、〒673-14 兵庫県加東郡社町下久米942-1 兵庫教育大学言語系教育講座 前田貞昭宛てお知らせいただければ幸甚である。

### 8 昭和7年（1932年）

#### 1 月

寝る前のとき＝母が炬燵で聞かせてくれた話＝

婦人公論・17巻1号（新年特別号・「全日本の女性を語る」号）・p. 80・1月1日（昭和6年12月15日）・中央公論社・牧野武夫・70銭

目次標題は「寝る前の時」。総ルビ。＊「私は子供のころ、母からオトギバナシをきかしてもらったことはない。祖父とさしむかひで炬燵にあたり、炬燵の上には広い板がおいてあつて、その板の上には必ずランプがおいてあるのだが、祖父は私に『大江山の鬼』のはなしや『舌切雀』のはなしをしてくれた。」そして、寝床へ入ってから、母にその話をして聞かせると、母はいちいち合点しながら聞いてくれたのである。

横光利一氏の挿話＝作家月旦＝

セルパン・11号（新年特別号）・pp. 74～75・1月1日（昭和6年12月15日）・第一書房・長谷川巳之吉・20銭

＊「四年前ごろまで横光氏のうちは、私のうちの直ぐ近くにあつた。」「そのころ私は思案にあまつたときには、いつも夜ふけになるまで夜路を歩きまはる癖があつたが、さういふとき横光氏の家の前を通るときには、必ずその書斎の窓に明りがついてゐて、窓硝子に唐草模様のカーテンがかゝつてゐるのが見えた。」「私は大急ぎで歩き去りながら、やはり嘆息をもらして次のやうに呟いた。／『いつもあんなに夜ふかしして、読書や小説に熱中してゐるのには驚くが、あれではからだを毀さないかね』」既に横光氏は現在の住所に引っ越してしまつたが、「今ではこの界隅（郊外の杉並町あたり）にはおいては、横光氏の人がらを語るために珍重なる挿話が残つてゐる」として、横光氏の人柄を語る、新刊書の本屋の主人の話と、阿佐ヶ谷の広東料理店ピノチオの主人の話とを紹介する。

角帽の色＝早稲田・恋にあけ涙に暮れるカレツダライフの物語＝

婦人画報・319号（新年号）・pp.139～141・1月1日（昭和6年12月15日）・東京社・今田謹吾（柳沼沢介）・1円20銭

本文末尾に「（完）」とある。総ルビ。＊「私」が早稲田に通っていた頃には、角帽に二種類あった。菅井北夫という学生は、流行に対しては時代遅れの人物で、すでに廃れる寸前の古いタイプの角帽を愛用していた。彼は滅多に学校に出て来なかったのに羅紗の色も褪めなかったが、多くの学生たちの帽子は変色していた。「私は今でも級友たちの帽子の色彩やその変色した帽子のかぶり主を、ことごとく暗誦することができると思ふ。」「卒業間際になって死んでしまった級友青木南八の帽子は、橙色に変色してゐて、やはり卒業すると直ぐに死んだ級友川口尚輝の帽子はコバルト色になつてゐた。私はこの二人の級友の霊が安らかであるやうに願ふものであるが、今は最早その二つの帽子や色彩を思ひ出すことは、私にとっては悲しい感慨で一ぱいの追懷に耽ることにほかならない。」「青木南八は私たちのクラスで最優等生の学生であつた。そして彼は文学のことは何でも知つてゐた。昔からの人形つかひの名前を全部系統だつて暗誦することさへもできた。」南八が登校の途中で、朝寝をしている「私」を起こしに来た話や、南八の葬儀の際、「私」が病氣見舞に持って行つたシャボテンの花が真っ盛りに咲き、香炉から立ち上る煙が、棺の上に置かれた角帽やシャボテンの花の上をしきりに流れては消えたこと、また、南八が死んで一年も経つのに「或る屈託ごとがあつたときなどには、彼の家の前まで行つて気がついた」ことを記す。

子供のときのこと＝作家の自叙伝＝

近代生活・4巻1号（新年特別号）・pp.47～48・1月1日（昭和6年12月18日）・近代生活社・飯島正（吉行栄助）・25銭

＊「これは私の子供のときの在る日の記録の一部である。」として、小学校入学の当日のことを記す。校長は、先生の教えが絶対であり、秩序を守り、氏神様の前を通るときには脱帽最敬礼しなければならない、資産家や村会議員や村長に会つたときには脱帽敬礼しなければならないと訓示し、「私」たちは脱帽最敬礼と脱帽敬礼とを演習させられた。

<無題>＝一九三二年への抱負＝ ＊アンケート回答

近代生活・4巻1号（新年特別号）・p.37・1月1日（昭和6年12月18日）・近代生活社・飯島正（吉行栄助）

目次標題は「一九三二年度への抱負」。「拝復。抱負といふほどのものがありません。どうかしなければいけないと思つてゐますが、べつだん思ひつきもないやうです。」以上井伏回答全文。

裸人健闘の像＝一九三二年の花形⑤徐廷権・口絵＝ ＊詩

文学時代・4巻1号（新年号）・p.11・1月1日（昭和6年12月19日）・新潮社・佐藤義亮・40銭

「徐廷権（ボクサア）」というキャプションの入った写真に添えて、以下のような「裸人健闘の像」と題する井伏の詩が掲げられている。＊「パンツ一つの丸裸／脊骨を曲げて立つた姿は／演説仕草に手足をひねり／ハレルヤ主エスに似たといふ／だが見たこともない面がまへ／コスメチックで髪を光らせ／噂にきけばこれはこれ／徐廷権とかいふ拳闘士」

洪水前後＝新進作家十三人集＝ ① [1. 7. 13. 24. 32. 35. 36. 38. 40. 44. 45. 47. 50. 53. 56. 57. 60. 62. 63. 64. 66. 67. 68. 70. 73. 75]

新潮・29年1号（新年号）・別pp. 93～99・1月1日（昭和6年12月20日）・新潮社・中根駒十郎・60銭

「川」の一部。『川』（江川書房・昭和7年10月20日）に初収録。

#### 使徒アンデレの手紙

小説・1輯・pp. 134～140・1月1日（昭和6年12月25日）・芝書店・飯島正／秋田滋＜編輯者として2名連記＞（芝隆一）・1円50銭

「使徒の手紙」として『婦人サロン』2巻11号（昭和5年11月1日）に初出。再録書に関しては初出の項で触れることにしたい。

#### 鳩時計（1）

報知新聞朝刊・19749号・14面・1月1日

挿画・碓伊之助。2月1日まで30回連載。パラルビ。なお、1月2日は休刊、1月6日は休載。＊「私」は、毎日、停留場で、女子美の生徒・佐子を待っていた。そのことを知っている、停留場の近くの小間物屋の小僧・庄太と親しくなる。小間物屋を飛び出した庄太は、中学生を装って、佐子たちの一団に近づき、その内の一人真子と庄太は親しく口をきくことに成功する。そして、庄太は、「私」のうちに、真子を下宿させることに決めてしまい、佐子も真子と一緒に下宿させることになってしまう。やがて、喧嘩した庄太と真子の二人は、「私」と佐子とを残して「私」のうちに飛び出してしまふ。再び現われた庄太は、なにやら佐子を脅しているようであったが、それは、佐子にも資本を出させてダンス教授の共同事業を計画しているからであるという。

#### 鳩時計（2）

報知新聞朝刊・19750号・6面・1月3日

#### 鳩時計（3）

報知新聞朝刊・19751号・6面・1月4日

酒場街風景＝1932年モンタージュ・文芸＝

読売新聞朝刊・19711号・4面・1月5日

瀬尾政記『井伏鱒二著作目録稿』（瀬尾環子・1988年5月24日）が15日とするのは



誤植か。パラルビ。＊「たいていどの酒場でも、クリスマスの室内装飾をそのまま引きついで正月を迎えるから、厳密な意味ではどこからどこまでが正月の装飾であるかを区別していふことが難しい。」「新年の酒場の風景は積みかさねた装飾の露出であるが、勢いつぱい美装したときの頂点でありたいと努力する姿に思はれる。」酒場に入入りする人々も、同様に浮かれているようだ。そして、「状態はかういふ急速度に展回する混雑のうちにすべての店を通じて、いつもより混雑のうちに、いつも見なれない一つの秩序に似たものがある。」

鳩時計（４）

報知新聞朝刊・19752号・3面・1月5日

鳩時計（５）

報知新聞朝刊・19754号・3面・1月7日

鳩時計（６）

報知新聞朝刊・19755号・3面・1月8日

鳩時計（７）

報知新聞朝刊・19756号・3面・1月9日

鳩時計（８）

報知新聞朝刊・19757号・3面・1月10日

鳩時計（９）

報知新聞朝刊・19758号・3面・1月11日

鳩時計（10）

報知新聞朝刊・19759号・3面・1月12日

鳩時計（11）

報知新聞朝刊・19760号・3面・1月13日

鳩時計（12）

報知新聞朝刊・19761号・3面・1月14日

鳩時計（13）

報知新聞朝刊・19762号・3面・1月15日

鳩時計（14）

報知新聞朝刊・19763号・3面・1月16日

鳩時計（15）

報知新聞朝刊・19764号・3面・1月17日

逃亡記＝作品＝

年刊 小説 1932年版（詩と詩論別冊）・pp. 66～80・1月18日（1月15日）・厚生閣書店・春山行夫（岡本正一）・2円

表紙には「ROMAN 1932」とある。「逃亡記（三）」として『作品』16号（2巻8号・昭和6年8月1日）に初出。再録書に関しては初出の項で触れる。

鳩時計（16）

報知新聞朝刊・19765号・3面・1月18日

鳩時計（17）

報知新聞朝刊・19766号・3面・1月19日

鳩時計（18）

報知新聞朝刊・19767号・3面・1月20日

鳩時計（19）

報知新聞朝刊・19768号・3面・1月21日

鳩時計（20）

報知新聞朝刊・19769号・3面・1月22日

鳩時計（21）

報知新聞朝刊・19770号・3面・1月23日

【明治大正文学全集】第55巻現代作家篇

春陽堂書店（和田利彦）・1月23日（1月19日）・四六判・目次4p・本文564p・＜非売品＞

第58回配本。発刊時の名称は『明治大正文学全集』。奥付・目次及び函には「明治大正文学全集」、扉には「明治大正昭和文学全集」、背には「明治大正（昭和）文学全集」とある。予約出版のために奥付には「非売品」とあるが、青山毅「『明治大正文学全集』について」（『文学全集の研究』明治書院・1990年5月25日）によれば、総布金泥表装の上製本は1円、背革金泥天金の装飾本1円50銭である。現物を確認したのは上製本。井伏鱒二篇には「朽助のゐる谷間」（pp. 451～471）・「丹下氏邸」（pp. 472～483）を収録。横光利一篇（「日輪」・「機械」）、十一谷義三郎篇（「あの道この道」・「街の犬」）、瀧井孝作篇（「ゲテモノ」

・「養子」・「結婚まで」・「父来たる」）、佐々木茂索篇（「おぢさんとおばあさんの話」・「ある死・次の死」・「兄との関係」・「或冬の日に」・「魚の心」・「是好日」・「所謂生き死に」）、川端康成篇（「伊豆の踊子」・「死体紹介人」・「十六歳の日記」）、中川与一篇（「肉親の賦」）、稲垣足穂篇（「天体嗜好症」・「青い箱と紅い骸骨」）、坪田譲治篇（「正太の馬」・「子供の憂鬱」・「正太樹をめぐる」）、龍胆寺雄篇（「放浪時代」）、久野豊彦篇（「シャッポで男をふせた女の話」）、井伏鱒二篇（「朽助のゐる谷間」・「丹下氏邸」）、堀辰雄篇（「眠つてゐる男」・「音楽のなかで」・「ルウベンスの偽画」）、嘉村磯多篇（「業苦」・「秋立つまで」）、小林秀雄篇（「オフエリヤ遺文」）、以上収録順。

鳩時計（22）

報知新聞朝刊・19771号・3面・1月24日

鳩時計（23）

報知新聞朝刊・19772号・3面・1月25日

鳩時計（24）

報知新聞朝刊・19773号・3面・1月26日

鳩時計（25）

報知新聞朝刊・19774号・3面・1月27日

鳩時計（26）

報知新聞朝刊・19775号・3面・1月28日

鳩時計（27）

報知新聞朝刊・19776号・3面・1月29日

鳩時計（28）

報知新聞朝刊・19777号・3面・1月30日

鳩時計（29）

報知新聞朝刊・19778号・3面・1月31日

2月

文章・描写・表現＝文章を語る（三）＝

帝国大学新聞・417号・5面・2月1日

パラルビ。＊「学生のときには私は散文よりも詩の方を好いてゐて、一ばん好きなのは支那の古い詩で、その次にヴェルレーヌの詩が好きであつた。」「支那の古い文章には、たいてい後代の学者が注釈をつけてゐて」、それが本文よりも別の意味で興味深い。ヴェルレーヌの方は、級友青木南八に読んでもらった。「散文ではチェホフやトルストイを私は好いてゐた。」「日本の作家では、そのころの文科学生の常例として、私は志賀直哉、佐藤春夫の文章を好いた。」「私たちのクラスでは『月評会』といふクラブをつくつて、片上伸、吉田絃二郎、本間久雄諸先生に出席してもらひ、学生たち相互の作品批評をしてゐた。」その席に出て来る学生の作品は、志賀直哉の真似か佐藤春夫の真似と相場が決まっていたのである。ロシア文学を評価する学生は小説を書かないで戯曲を書いていた。大正八年頃のことである。

遠来の客－好ましきコント集－

婦人サロン・4巻2号（2月号）・pp. 130～132・2月1日（1月15日）・文芸春秋社・鈴木氏亨・40銭

『福岡日日新聞』朝刊・19700号（昭和11年11月16日）にも同題作品があるが別文。総ルビ。＊「こないだ私は遠い田舎へ旅行して、或る古ぼけた宿屋に一週間ばかり泊つてゐたが、そこを出発しようとする前の日に、私の隣の部屋へ珍奇な泊り客があつた。」ろくに日本語の話せない外国人の年寄りであつた。この老人が言うには、自分はロシアの貴族で、ウラル・コサックの騎兵将校であつた時、ロシア軍の捕虜となつてゐた宿の主人・岡野伊八と会つたということである。そして、捕虜としても立派な態度を取つてゐた岡野伊八に再会するために訪問したと言う。やがて、再会した二人はいたく感動した様子であつた。

旧作のこと＝代表作は如何にして生れたか＝

近代生活・4巻2号（2月号）・pp. 52～53・2月1日（1月23日）・近代生活社・飯島正（吉行栄助）・25銭

＊「朽助のゐる谷間」の創作過程を記す。「よほど以前田舎へ帰つたとき谷間に池をつくる基礎工事が行はれてゐるのを見物した。そして、「私はこの谷間が大きな池になつた後のことや、この谷間における過去の出来ごとなどを考へたり」した。「朽助のゐる谷間」は、「架空の物語で、私はこの物語に出て来る朽助、私、タエトといふ三人の人物についても、ありあはせの実在人物の性格を模写してみたのであります。」「この小説を書いたのは、池の工事を見て来た年の冬のことで、十二月三十一日の夜から書きだして――新年にどこにも出ないでゐなくてはならないのがつらくて、正月七日まで家に逼塞して書きました。出来栄えは小説としてどこことなく幼稚だといふ説にも同感であると同時に、新しいイズムが欠亡してゐるといふ説にも同感であります。」「最初、三田文学に出として友人に頼んでおきましたが、その友人が三田文学の会合に出席しなかつたので、止むを得ずうつちやつとききました。その後、創作月刊の編輯永井龍男が小説を書けとい

つて来たので、よろこび勇んで直ぐに友人のところから持ち帰って永井龍男に送りました。」

#### 湘南風景

新潮・29年2号(2月号)・pp.95~97・2月1日(1月23日)・新潮社・中根駒十郎・50銭

\*「鎌倉の町はづれから海岸つたひに歩いて行つて、左手の海の風景と右手の丘陵の風景とを湘南風景といふ。」所々にある町は田舎風に出来ている。そうでなければ思い切って都会風の家がある。そこに住む人々や風景を描く。

#### 菅平高原への御案内記

古東多万・2年2号(2月号)・pp.109~111・2月1日(1月25日)・やぼんな書房・佐藤春夫(五十沢二郎)・70銭

\*「去年の冬、私は菅平高原で雪滑りを習つて来た。」スキーで登った岡からの眺望について説明する。

#### <無題>=一月の作品・一人一作評=

作品・3巻2号(22号・2月号)・p.103・2月1日(1月30日)・作品社・駒沢文一・30銭

\*「この雑誌に三回づいて河上君の『ジッドとワイルド』が載つたが、それに感心した結果、ジッドの『オスカア・ワイルド』を読んだ。」「ワイルドについては、河上君の書いてゐるのとジッドの書いてゐるのとは少し違つてゐると思はれる。」「私は対照して興味ふかく思つてゐる。」

#### 鳩時計(30)

報知新聞朝刊・19779号・3面・2月1日

本文末尾に「(完)」とある。

#### 黒い胸像=第2部=

文学クオタリイ・1輯・pp.231~232・2月10日(2月7日)・大盛堂書店・保高德蔵・1円50銭

表紙には「文学クオタリイ 1 QUATERLY SPRING 1930」、扉に「1 大盛堂書店」とある。保高德蔵によると思われる文章に、「第一輯は創作のみを収録した。第一部には新作を、第二部には旧作を輯めたが、旧作の方は、各作家の近業から、最も気に入った作品を主として撰んでいたのである。『大阪朝日新聞』朝刊・17959号(昭和6年11月8日)に初出。

#### 荒廃の風景(一)-旅行記- =文芸= ⑨ [4.18.25.33.41.42]

都新聞朝刊・15899号・1面・2月27日

3月1日まで4回連載。パラルビ。『田園記』(作品社・昭和9年5月15日)に初収録。

『田園記』所収本文末尾には「（七年四月）」とある。なお、『源太が手紙』（筑摩書房・1956年1月30日）の「あとがき」に、井伏は、「『荒廃の風景』の『私』は、自分ではなくて私の郷里の山根太郎である。いつか郷里に帰ったとき、山根太郎から聞いた話をそのまま書きとめたもので、話の筋道に潤色はないが山根と書くべきを『私』と加工した。」と記している。

大阪散策＝随筆＝

サンデー毎日・11年10号・p.35・2月28日・大阪毎日新聞社・荒木利一郎・12銭

本文末尾に「（終）」とある。パラルビ。\*「私は先日、私の小説のなかの主人公に『心さわがば旅に出でよ』といふ詩を口ずさませて、さうして私は直ぐに旅行に出た。大阪へ途中下車して、梅田駅の近くにある文化色型の旅館に泊ったが、私の心は相変らず平静になることができなかった。」「大阪の酒でものんでみようといふ気持ちになって、私は日が暮れるのを待ちかまへて散歩に出た。」この前、大阪に来た永井龍男が、大阪の酒はおいしくて、蟻船の女中に納豆を送る約束をしたと言っていたので、「私」も蟻船に行き、女中に納豆を送る約束をしようと思った。しかし、「私」は、蟻船で甚だ酔った上に、女中には「私」の申し出を断わられてしまった。蟻船を出た「私」は、カフェ・ユニオンというのに入り、さらに、「私」に似た男がバーテンをしているという別のカフェに行った。

荒廃の風景（二）－旅行記－＝文芸＝

都新聞朝刊・15900号・1面・2月28日

荒廃の風景（三）－旅行記－＝文芸＝

都新聞朝刊・15901号・1面・2月29日

3月

荒廃の風景（四）－旅行記－＝文芸＝

都新聞朝刊・15902号・1面・3月1日

本文末尾に「（終）」とある。

気のすゝまない結婚＝春のコント＝

婦人世界・27巻3号（3月号）・p.305・3月1日（2月13日）・婦人世界社・山本三生・50銭

目次には「気のすゝまぬ結婚」とある。本文末尾に井伏の肖像写真が掲げられている。総ルビ。\*「このあいだ野田君は、手紙を大阪にゐる彼の恋人に出したが、そのついでに福岡にゐる彼の恋人にも手紙を書いた。福岡にゐる恋人といふのは、もう野田君は嫌やになつてゐる恋人で、大阪にゐる恋人は非常に好きな恋人である。」ところが、野田君は中身を取り違えて送り、結局、福岡からやってきた恋

人と結婚したのである。

残りすくない青春＝春の秘密を探る＝

文学時代・4巻3号（3月号）・pp.98～102・3月1日（2月19日）・新潮社・佐藤義亮・40銭

総ルビ。\*「私は学生のときにも学生でなくなつてからも、前後十一年間ほど早稲田鶴巻町界限の下宿で暮した。」同じ下宿屋にいたわけではないが、「南越館といふ下宿屋には十一年間に五度も下宿した。」南越館の主人は、「私」が引越して来る度に、「単調な一家言を語った」。そして、五度目には「お前さんには、もう青春が三日くらゐしか残つてゐないみたい」だと言った。「全くその通りである。私は十一年間を鶴巻町界限の下宿屋で暮して、私の貴重な青春をすっかり鶴巻町の溝にでも棄て、しまつたと同然である。」「さうしてそのころよりも、現在は、私は更に青春を失つてゐる筈であるが、やはり私の青春は今後三日くらゐは残つてゐるさうであると思はれる。」「そこで私は、私自身の青春に感じを悪くさせたくないと考へて、市内へ散歩に出た。」酒場へ行ってみたが、女給には歓迎されない。そこで、タクシーを拾つて「健康で暢気で熱狂的なところへ走つて行つてくれ」と注文したところ、連れて行かれたのは浅草のレビュー劇場の前だった。「私」はがっかりした。下手に慌てるよりも、鶴巻町の喫茶店にでも行くのがいいと、鶴巻町のカイソウという喫茶店に行った。痩せたおかみさんと婚期を失った娘とがいるカイソウは、学生時代のままであった。鉢植えの木瓜は出来損ないのまま赤い花を開いている。「婚期を失つたこの家の娘は、おそらくこの鉢植えの木瓜の花を眺めて、幾度となく嘆息をもらしたであらうと私は推察する。」

4月

一人一評＝「聖家族」誌上出版記念会＝ [52]

作品・3巻4号（24号・7月号）・pp.76～77・4月1日（3月29日）・作品社・駒沢文一・35銭

『堀辰雄全集』第10巻（角川書店・1965年12月20日）に初収録。\*「江川書房月報の『聖家族限定版に』といふ章で」、堀辰雄は次のように言っている。締切を控えながら何も書けずに悶々として、ようやく一週間でこれを書き上げた。その間、妙に忘れられないのは人から精がつくと言われて、無花果をかじっていたことである。もう無花果は喰うまい――。「昭和五年初秋のころにおける彼は、心の苦痛に耐えかねてゐたやうである。この苦痛を利用して、彼は『聖家族』を書いたと告白してゐる。さうして書きあげると同時に、今度は発熱し健康をそこねた。」もし徹夜なんかしなければ堀は病気にならなかつたかも知れないし、無花果を食べるようにすすめたのは「私」であつたかも知れない。「けれど堀は徹夜でもして一気呵成に書かなくては、『聖家族』の素材をとりあつかふことができ

なかったであろう。たゞ病気になったといふ結果は残念である。」「堀がその素材をなつかしむのと同じ程度に、私は『聖家族』の出来栄えをなつかしく思ふ。」

#### ボタ山に見える病院（一）

時事新報朝刊・17551号・4面・4月18日

4月19日、21日に続けて掲載。パラルピ。＊「私が見学して来た鉱業所病院といふのは、その山岳地帯で一ばん高い山の中腹にあつて、私はその病院の手術室の窓から、幾つもの炭坑の所在やボタ山の燃える光景を眺望することができた。」「雨が降りだすと、この円錐形の山は薄藍色の煙を出しつゞける程度に燃えるのである。」「この付近一帯は山の土も石も樹木も真黒になつてゐて、さういふ黒の単色風景に薄藍色の煙が立ちのぼる有様は、たいいていその風景を眺める人の気持ちを滅入らせてしまふであらうと思はれる。」「私はこゝの鉱業所病院を訪ねるとき、山麓の直ぐ近くまでガソリン・カアに乗つて来たが、隣りの席に首の曲つてゐる女が乗つてゐた。それは石炭の選別作業のときに、一定の姿勢を続ける結果、首が曲がってしまつてゐるのである。」「こゝの鉱業所病院は評判によると、炭鉱病院として全国で一ばんよく設備が行きとゞいてゐるといふことであるが、私は今までにこんな殺伐な設備の病院を見たことがない。」「私」は、真っ黒になつた一人のけが人が風呂に入れられているのを見た。洗われてみると、けが人の肩がふくれあがつてゐるのが分かり、やがてけが人の体全体が紫色にふくれあがつてしまつた。」「私」がその光景から目を背けている間に、医者は、「あなたの顔は、真青になりましたが、なるほど、この怪我人が助からないとすれば、実際は私の顔も青くならなければいけない。厳密にいへば、医者といふものは九人の患者の生命を助けることができて、一人の患者を殺しては何にもならない。私がこの膨れあがつた怪我人に手術を施す前に、こんな無駄口をきく意味がわかりますか？生徒の前で難問題をごまかすときの先生みたいですね」と述懐した。」「私」はその部屋から出て庭のベンチに腰掛け、怪我人を連れて来た坑夫と話した。この病院では骨折患者が全快したことは一年このかたまだ一度もなく、「こゝの炭鉱に病院が出来るまでは、怪我人は直ぐに死ぬか直ぐに恢復するかのどちらかで、このごろのやうに坑夫たちが大病のまゝ病院で生きてゐるといふわけには行かなかつた」、けれど、坑夫たちの暮らし向きは病院が出来てからまるきり駄目になつてしまつた、収入の大部分は病院に吸い取られてしまう、はっきり死んでしまふか、はっきり生きて景気よく暮らすか、そのどちらかでないとわれわれはやりきれない——このやうに坑夫は言った。そして、彼は、「私」に金を貸せば一儲けできると盛んに持ちかけた。」「私」は病院の中に入り、「こゝで私は病室の模様をも述べるついでを得たのであるが、他人のあまり惨めな光景を書くことはどうかと思ふので、これだけは止しにしよう。手のちぎれてゐる坑夫や、青んぶくれのしてゐる病人のことを実直に書くのは、非常に神経を疲れさすだけのことで、この紀行文で私は、ボタ山の煙が空に立ちのぼつてゐる姿を叙景できれば満足なのである。」



ボタ山の見える病院（二）

時事新報朝刊・17552号・4面・4月19日

ボタ山の見える病院（完）

時事新報朝刊・17554号・4面・4月21日

## 5月

結婚報告狂の女＝変った女の一生＝

婦人公論・17巻5号（5月特別読者慰安号）・pp.89～91・5月1日（4月15日）・中央公論社・牧野武夫・50銭

総ルビ。＊「私は風変りな女性と交際した経験に乏しい。」「女性は、私たちの想像の外にあつて常に風変りである。」「もうせん三年も前のことであつたらう。私は京都に旅行したことがある。」その時、一人の女と知り合いになった。その女から、何度か呼び出しを受け、その都度、結婚式の前日だからゆっくりお目にかかれぬという口上を聞かされたのである。

青瑛玕＝随筆＝ ⑨ [2.6.19.25]

文芸春秋・10年5号（5月号）・pp.13～14・5月1日（4月18日）・文芸春秋社・小峰八郎・40銭

『随筆』（椎の木社・昭和8年5月31日）に初収録。この『随筆』所収本文以降では、「追記」として本文中に書かれた黄瀛に関する噂話の訂正がなされている。この追記の件については「黄瀛」（『作品』27号・3巻7号・昭和7年7月1日）を参照。

その地帯におけるロケーション＝創作＝ ① [1.7.13.24.32.35.36.38.40.44.45.47.50.

53.56.57.60.62.63.64.66.67.68.70.73.75]

新潮・29年5号（5月号）・別pp.21～31・5月1日（4月23日）・新潮社・中根駒十郎・50銭

目次には「その地帯のロケーション」となっている。本文末尾に「（完）」とある。「川」の一部。『川』（江川書房・昭和7年10月20日）に初収録。

梶井君の逝去＝梶井基次郎追悼＝

作品・3巻5号（25号・梶井基次郎追悼号・5月号）・p.12・5月1日（4月29日）・作品社・駒沢文一・35銭

＊「かねて病床中の梶井基次郎氏は去る三月二十四日、大阪市住吉区王子町二ノ四四の自宅において永眠されました。追惜の情にたえず、謹んで哀悼の意を表します。」以上全文。

6月

野球愛好の図

モダン日本・＜3巻6号＞（21号・6月野球号）・pp. 21～22・6月1日（5月5日）・モダン日本社・馬湘圭・15銭

＊来日したアメリカのプロ野球団団長に当たる人が、東京市内の空き地で、勤め人や小僧さんがキャッチボールをしているのを見て嬉しく思ったと話していた。なるほど、日本には東京にも田舎にも野球愛好家が多い。「私」の郷里のうちの庭にも、近所の子供が十二、三人来て野球をしていた。「私」も「中央沿線クラブ」という野球団に属する一員である。

新緑＝朗々集＝ [4.18.26]

婦人サロン・4巻6号（6月号）・pp.192～194・6月1日（5月15日）・文芸春秋社・鈴木氏亨・40銭

総ルビ。『田園記』（作品社・昭和9年5月15日）に初収録。『田園記』所収本文末尾には「（七年五月）」とある。＊「このあひだ私は、B先生やM氏やG氏やH氏やO氏たちといつしよに、八人づれで三浦半島を一周する小旅行をして来た。」金沢八景・油壺の荒井城跡を巡ったが、O氏は「私」に唐突にある女学校の生徒が十干十二支を忘れて困惑した挙げ句に書いたという答を話した。

微弱なる心痛＝創作＝

文学時代・4巻6号（6月号）・pp.308～319・6月1日（5月19日）・新潮社・佐藤義亮・40銭

本文末尾に「（完）」とある。総ルビ。なお、本号には中村正常「井伏鱒二君の横顔」（pp. 94～95）が掲載されている。＊「旅行先でその土地の婦女子に恋愛するのは考へものである。」「私は一週間の予定で旅行に出たが、やはり旅行先でさういふ恋愛に夢中になつて、たうとう一箇月あまりもその土地に滞在した。」「私」は、山の頂上の屋台店を経営する彼女に会うために、毎日山の頂上まで出かけて、絵はがきを一組ずつ買った。他の遊覧客がいなくなるのを待ったが、他にも客がいるうちに彼女は屋台店を畳み、山を下りて行った。「私」が追いかけて行って恋愛を打ち明けると、彼女をだましたり、店の金をまきあげない限り、今日一度だけ一緒に山を下りてもよいと言う。「私」は、彼女の気持を計りかねたが、彼女の手を握り頬を近づけると彼女は逃げ出してしまった。「私は屋台店の彼女のために名勝案内の説明を起草してやろうと考へついた。」「私」は、客層を想定して三種類の口上を書き上げて、彼女のところに持ち込もうとしたが、彼女は、すでに二種類の口上を採用していたと言って、それぞれを語ってくれた。「私」の作った口上をきっかけに、彼女と親密になることができたが、「私」は心を残しながら帰らなければならなかったのである。

隣人 [4]

三田文学・＜第2次＞7巻6号（6月号）・pp.116～118・6月1日（5月20日）・三田文学会・和木清三郎（西脇順三郎）・50銭

編集人は奥付には明記されていないが、奥付の脇に「投稿、編輯、図書雑誌寄贈」の宛先として和木清三郎の名が掲げられているのに従った。『田園記』（作品社・昭和9年5月10日）に初収録。『田園記』所収本文末尾には「（七年五月）」とある。『文芸往来』1巻1号（1949年1月）初出の同名標題の作品がある（『試験監督』文芸春秋社・昭和24年9月30日に初収録）が別文。\*「お隣の本望達太郎氏は去年の十月十四日の朝、腸ねんてんで逝去された。急なことで私たちは全く驚いてしまった。」葬儀後本望さんの奥さんは引っ越して行き、本望さん宅は売りに出ていたが、値が高くて買い手がつかなかった。「私は今日、梯子に乗って私のうちの榎の木の枝をおろした。その梯子は、本望さんの奥さんが引越して行くとき、私のうちへ呉れた品物である。」

埋草断鈔

梔子・3巻6号（6月号）・p.4・6月1日（5月20日）・梔子社・福本美馬（戸取美晴）・13銭

\*孟子離婁篇の章句、「道在爾而求諸遠。事在易而求諸難。」と「誠者天之道也。思誠者人之道也。」の二つについて井伏なりの解釈を加える。

五日間＝日記の一週間＝

近代生活・4巻5号（6月号）・pp.39～41・6月1日（5月26日）近代生活社・飯島正（吉行栄助）・30銭

『近代生活』2月号が休刊のため、巻号と月号とはズレが生じている。\*「五月五日」、「五月六日」、「五月七日」、「七月八日」、「七月九日」の日記。鷗外全集を読むことにしたという記事と、龍胆寺雄の結婚式出席記事がある。

小説と作中人物（上）

時事新報朝刊・17608号・7面・6月14日

16日に続載。\*「私は現実の人間を愛したり憎んだりする精神に似てゐる一種の体力ともいふべきものによつて、やはり小説のなかに出て来る人物を好いたり嫌ったりして、場合によつては十年も前に読んだ小説の作中人物に手つだつてもらつて、この混乱した気持ちを撲滅することもある。」「小説のなかに現はれる人物といふものは、たいていありふれた名前をつけられてゐるが、その本来からいへば再現された生命の鼓動とでもいふべきであらう。または生命の姿勢であるといつてみてもいい。混乱した気持ちが撲滅できるのは、たぶんさういふ生命の作用を感じるからであらうと思はれる。」「作品の傾向によつては、作中人物を推論の器具として用ひられてゐることがある。この作中人物は、感情を個人的に現はすことが許されなくて、たとへば機械の一部分の役目を引受けたのと同様に、

作品の構図のなかに、推理の都合上から充填されてゐるのである。」

#### 小説と作中人物（下）

時事新報朝刊・17610号・7面・6月16日

本文末尾に「（完）」とある。

#### 7月

堀辰雄氏＝作家リレー訪問 7・作家リレー訪問（十六景）・口絵＝

文学時代・4巻7号（7月号）・p.12・7月1日（6月19日）・新潮社・佐藤義亮・40銭

堀辰雄の写真一葉がある。＊「堀君は『恢復期』といふ小説を書くと、直ぐ健康になつてしまつたから痛快です。人生は芸術を模倣するといふ文学談を、たぶん彼は言葉通りに採用して、彼の肉体に一つの現象を生じさせたのかもしれないと思はれる。そんなに手ぎはよく彼は恢復しました。なにしろ慶賀すべきことだから、その記念撮影とでもいふやうなものを一つ……。」以上全文。なお、本号掲載の「作家リレー訪問 6」は、吉行エイスケの「井伏鱒二氏」で、「井伏君はこれまで度々写真を出されるが、あの美しい奥さんと一度も撮されないのはどういふわけだらう。今度はぜひ、奥さんと、お子さんと家庭円満な処を拝見したい。どうしてもいやだといふなら考へがある……／井伏氏曰く『女房はゐません。留守なものは仕方がないでせう。吉行君に考へがあつてもこはくはないから、僕一人で撮つて下さい。もう一度来てもやつぱり女房は留守でせう』」とある。

#### 黄瀛

作品・3巻7号（27号・7月号）・pp.87～89・7月1日（6月24日）・作品社・駒沢文一・35銭

＊「文芸春秋五月号の随筆で私は黄瀛氏に関する噂を書いたが、たいへん事実と違ふところがあるので、この頁を拝借して訂正をこゝろみたい。」その時「私」は、蒋介石直属の陸軍大尉であつた黄瀛は、帰国すると大佐に昇進したが、伝書鳩の演習に失敗して少佐に格下げされたと書いた。ところが、黄瀛から手紙が来てそんな事実はないと言う。なお、この「文芸春秋五月号の随筆」とは、「青瑣玕」（『文芸春秋』10年5号・昭和7年5月1日）のことだが、筑摩書房版井伏鱒二全集所収の「青瑣玕」では、「追記」として噂話の訂正がなされている。

広津和郎＝一頁人物論＝

新潮・29年7号（7月号）p.39・7月1日（6月24日）・新潮社・中根駒十郎・50銭

＊「最近の広津和郎氏を研究するには、物凄く評判になつた作品『女給』篇を読まなくてはいけないと思ふが、私はまだそれを読んでゐない。けれど私は初期の広津氏の作品はたいてい読んで、そのころの私は『転落する石』の主人公を真似て、最後は成功しないで終る恋愛の相手を見つけようと真面目に考へてゐたほど

である。」「しばしば憂鬱といふ言葉で表現されてゐる広津氏の打ちくだかれた正義感は、私の性情に適切な休息を与へ、また私の感情に地味な調節をこころみてくれたわけである。今でも私は、その芸術的作用によつて私が絶望を早めたとは思つてゐない。」「けれど世のなかがこんなに面白くないとは今更ら私は意外である。こんな馬鹿な筈はないと思つてゐるが、実に面白くないのである。このあいだも田舎へ行つて来て、私は惨憺な状態にある農村を見て来た。ただ私たちは沈黙を命じられてゐる。」

挿絵の感想（上）＝文芸＝

読売新聞朝刊・19890号・4面・7月3日

7月5日に連載。パラルピ。＊「先日、東京日日新聞の学芸欄で小島善太郎氏が小説の挿絵について、挿絵といふものは小説の持つてゐる個性に対して忠実でなければいけないといふ意味のことを述べられてゐる。それは甚だ尤もな提言であるが、忠実であるといふ意味の解釈次第では、多少の考究を要する提言であると思ふ。」ブレークやムンク、ピカソの挿画についての感想を記す。

挿絵の感想（下）＝文芸＝

読売新聞朝刊・19892号・4面・7月5日

をんな

あらくれ・1輯（創刊号）・p.5・7月15日（7月10日）・秋声会・徳田一穂・5銭

『田園記』（作品社・昭和9年5月15日）所収「をんな」とは別文。＊「これは恋愛でもなく友情といふのでもなく、また義理といふやうなものでもないが、こないだ二年ぶりに彼女が訪ねて来て、私はいつもの家庭争議の相手がそれを感じきはしないかと心配したけれど、都合よくそのとき私は井戸端に出て顔を洗つてゐたので、垣根のところから私に手招きしてみせた彼女の後を追つて、私はこつそりうちから抜け出した。」「九年ほど前に、私が東京を逃げだして田舎のY町にゐる友人のうちに厄介になつてゐたとき、友人も私の身の上について心配してくれ、結婚でもしたらどうかと言つてくれたりして、その町の一人の少女を私に紹介してくれた。」それが彼女である。どういうわけか、その結婚話は友人が中止させてしまったが、彼女は七年目に「私」の住所が分かったからといって突然訪ねて来た。「それから二年たつて彼女は再び訪ねて来てくれたのである。人通りのない原っぱで、私たちは汚い下駄のことについて五分間ばかり話して直ぐに別れた。」なお、これと同様の事件が「女人来訪」（『文芸春秋』11年2号・昭和8年2月1日）の題材にされている。

8月

日本漂流民―小説のノート― ⑨ 自傳 [2]

作品・3巻8号(28号・8月号)・pp.41~51・8月1日(7月24日)・作品社・駒沢文一・35銭

「日本漂民」と改題して、『随筆』(椎の木社・昭和8年5月31日)に初収録。

客人=創作特輯十篇= [3]

新潮・29年8号(8月号)・pp.92~99・8月1日(7月24日)・新潮社・中根駒十郎・50銭

文芸復興叢書『逃亡記』(改造社・昭和9年4月20日)に初収録。\*「豊田伍一といふ老人は、私のうちに逗留してゐる間に一度、卒倒した。」「彼は農村救済請願運動のなりゆきを実地に見聞するためわざわざ田舎からやつて来て、その余暇には生活難のために彼の田舎から東京に出て来てゐる青年子女の生活状態を調査する計画であつた。」「老人の卒倒は、極く軽い一種の痙攣であつたと思はれる。」その日、老人は、「市内を歩きまはつて、田舎から来てゐる一人の青年を訪ね」て、郷里の青年子女や貧困者のために就職口を周旋してくれるように依頼するが、断わられてしまう。夕刊を買いに行くという老人と一緒に出た「私」は、夕刊が店に到着するまでの間、ベビー・ゴルフ場で、時間をつぶしていた。そのとき、鳥籠ともども捨てられた十姉妹を見つけた。十姉妹は野原に放してやっても生きていけるだろうかと老人に尋ねると、当分は生きていだろうが、田舎の農村では穀物を荒らすから放鳥は禁じていると答えて、鳥籠の中を覗き込んだ。「老人の鼻孔から出る息は、なまぬるい空気を私の首のあたりに流動させ、その息は思案にくれた老人の悲嘆それ自体であつたと思はれる。老人はやがて咳をしたり衣物の袖で額を拭いたりして、どうしても今晚の汽車で出発して田舎に帰ると言ひだしたのである。」

9月

眠れない夜=短篇小説=

婦人サロン・4巻9号(9月特輯号)・pp.154~161・9月1日(8月15日)・文芸春秋社・鈴木氏亨・45銭

総ルビ。挿画・小林三。本文末尾に「(完)」とある。\*「私のうちの直ぐ前隣り」のうちでは四匹の犬を飼っている。その犬の鳴き声は非常にうるさい。「私のうちの飼犬であると思ひがちにひしてゐるのに相違ない」、匿名の強硬な手紙を「私」は受け取った。「彼は眠れなくて弱るのを私の責任であるといつて抗議してゐるが、私の困りかたは眠れなくて弱るといふ程度のものでない。」「私」の責任を追及する、こんな抗議の手紙を受け取ったために、「私」の怒りはますます大きくなった。しかし、匿名の手紙の主を捜し当てることができないでいると、二三日して、今度は、犬を殺すという内容の手紙が来た。「私の家庭争議の相手」は、犬が殺される前にご馳走してやろうと奇妙な料理をこしらえた。ところが、それから数日経っても、犬は一匹も殺されはしなかった。眠れない「私」は、市

内のホテルへ泊まりに行くことにした。

#### 居酒屋風景 [4]

改造・14巻9号(9月号)・pp.16~24・9月1日(8月18日)・改造社・山本三生・50銭  
『田園記』(作品社・昭和9年5月15日)の「酒」の内の「B」として初収録。  
『田園記』所収本文末尾には「七年初夏」とある。\*「このごろ私は、まるきり  
酒場通ひがへたくそになってしまったので、さういふ機会があつても殆ど気のり  
がしないことに自分で定めてゐる。けれどこの傾向は単に私一個人に關すること  
であつて、やはり酒場通ひは一般の流行であるらしい。」「私」のうちから最寄  
りの荻窪駅までの間にも相当な数の酒場が出来ている。ヨシノヤ、ラリメン、ノ  
ンキという酒場の風景、また、夜逃げする予定になっていた酒場に行ったの様子  
などを記す。

#### 南窗集の出版＝「南窗集」誌上出版記念会＝

作品・3巻9号(29号・9月号)・p.78・9月1日(8月24日)・作品社・駒沢文一・35銭  
\*「いま私は病床の彼を訪問して来たばかりのところですよ。間もなく全快する彼  
の病状を報告することによつて、出版記念会の挨拶に代える次第です。」と結ば  
れるように、三好達治を見舞った時の様子や、『南窗集』についての感想を記す。

#### 森鷗外論＝明治・大正の大作家再検討＝

新潮・29年9号(9月号)・pp.66~70・9月1日(8月24日)・新潮社・中根駒十郎・50  
銭

\*「鷗外の晩年の力作『伊沢蘭軒』と初期の創作ともいふべき『即興詩人』とは、  
たがひに対照してみても興味ふかい色彩の区別をもつてゐるが、なぜ鷗外が幕末の  
第二流どころのお医者伊沢蘭軒やアンデルセンの恋愛小説に熱中したのか私は了  
解に苦しむ。」「鷗外に馬鹿ものあつかひにされてゐるかもしれない腹いせに、  
せめて皮肉をいつてみれば、おそらく彼は平凡な人間を十倍の大きさにしてみせ  
るために、考証ごとに夢中になつたのであらうといふよりはかはない。けれど  
『伊沢蘭軒』ばかりでなく、すべて鷗外の史伝小説には考証の実質の裏面に、莫  
大な詩の精神が活動をつづけてゐる。」「鷗外の史伝小説は『山椒太夫』をはじ  
め『寒山拾得』『阿部一族』『最後の一句』その他、殆ど力と無力との対立に端  
緒を發して構成されてゐて、犯し難い詩がそこに存在する。それ来たとばかりの  
高度の正義感なくしては、かういふ構成の作品は不純になってしまうのである。」「  
私は史伝小説のうちで『山椒太夫』を最も愛してゐる。さういふひかたが失  
礼ならば、これは最も私を啓発してくれた作品であるといひなほしてもいい。」「  
人間の根強い生命力は、いつでもその生命を泥土に還元さすまいと必死になつ  
てゐるのである。」— そういう主張がこの作品からは読み取れた。「文学はす  
べて自己弁解であり、また生活そのものも自己弁解にほかならないものであると  
いふ」鷗外の考え方から、「キタ・セクスアリス」、「青年」などの作品の一面  
も捉えられる。「鷗外の作品の意図については、晩年の心境小説『妄想』を読め

ば、たいてい判断がつくであらう。」「鷗外の文学上の仕事」が、「すでに存在してゐる史伝や外国の作品を根拠として仕事にとりかゝつたものが多い」のは、「科学的に思索した影響にもよるのであらう。」

#### 自分への吟味

ヌウヴェル・1輯・pp. 3～5・9月1日（8月25日）・朝日書房・神戸雄一（川崎久利）・1円50銭

「自分への吟味 — 新しい文学に対して —」（『時事新報』朝刊・17276号～17277号・昭和6年7月15日～16日）が初出。なお、本『ヌウヴェル』は、『小説・エッセイ』と改題した上製本が刊行されている（朝日書房・昭和7年12月25日）。編輯同人「ヌウヴェル後記」には、「文学上の一つの傾向が前の傾向にとつて代るには、必ずそこに必然性がなければならないが、屢々それは偶然と見えるデリケートな環境のもとに育てられるものである。極めて人々が予期しないところに顕れ出るものである。亦それと反対に、必然性をもつた後継者達が、案外その根幹に必然でない関係をもつてゐるために枯渇していつた場合もある。／われわれのこの『ヌウヴェル』の仕事、そして他の人々の種々なクォーターリーや雑誌の仕事、それらの存在は、まことに次の時代のよき成熟を造るべきグループを、何処かで育ててゐることを予想させるものなのである。何故ならば、それはデヤナーリズムの迫害から、その風雨を、各々小さな手で避けてゐるからである。」と言ひ、次輯以降について「第一輯は倉皇のうちに纏められたので、われわれの意図が十分に顕はれてゐない憾みがある。二輯三輯についてわれわれは多くの計画を持つてゐる。輯を重ねるに従つて、われわれの意図は鮮明にされてゆくであらう。」と述べている。

#### 四十雀 [6.19.25.33]

あらくれ・2輯・p. 14・9月5日（9月3日）・秋声会・徳田一穂・5銭

『静思夜』（三笠書房・昭和11年8月15日）に初収録。なお、『早稲田の森』（新潮社・1971年9月25日）、現代日本のエッセイ『人と人影』（毎日新聞社・1972年5月5日）、『井伏鱒二全集』14巻（筑摩書房・1978年7月28日）、日本の随筆2『鳥』（作品社・1983年4月25日）、『井伏鱒二自選全集』10巻（新潮社・1986年7月20日）、講談社文芸文庫『人と人影』（講談社・1990年2月10日）に収録されている「四十雀」は、『新潮』1970年11月に初出のもので別文。\*「高田類三氏のうちには、庭の泰山木の根元に太鼓型の陶製の腰掛が置いてあるが、その腰掛のなかに今年には四十雀が巣をつくつた。」その四十雀の巣の様子や、高田氏宅の庭にある松の巨木のこと、雛鳥の巣立ちの様子を記す。

朝＝2000字コント＝

サンデー毎日秋季特別号・11年42号・pp. 82～83・9月10日（8月31日）・大阪毎日新聞社・荒木利一郎・20銭

挿画・中野修二。総ルビ。\*「私は大阪に滞在してゐたとき、或るお寺の境内で、



腕つぶしの強さうな年少の坊主とにらみ合ひをしたことがある。」まだ修業中の坊主と、出勤途中の一人の少女とが待ち合わせていたのを、早朝に散歩に出かけた「私」が目撃し、言い合ひをしている二人に咳払いをしたのである。「私」は、この二人の口論の原因であるらしい巻煙草を持ってきてやろうと約束したので、翌朝、同じ場所に行ってみたが、男は姿を見せず、「私」は池に咲いている睡蓮の花を眺めていた。

文学愛好の一老女－或ひはイズム奇譚－

時事新報朝刊・17701号・5面・9月15日

9月17日まで3回連載。連載第1回には「(上)」という表示はない。パラルビ。＊「つまらない行きがかりや極めて些細な出来ごとのため、または失恋や借財のため、その人の文学的行動に思ひもよらない変調を来すことがある。」「私」はQ先生の「文学的行動を引例しながら、実生活のつまらない行きがかりのためにどういふ変化がその文学的生涯に起つたかを述べたいと思ふ。」リアリズム文学を遵奉していたQ先生は、「或る一人の不幸な寡婦」を争ってQダッシ先生と仲違いし、Qダッシ先生が新しく輸入された新刊の神秘主義文学論を持っていたのに先手を打って、「リアリズム文学から神秘主義文学に豹変したと発表したのである。」「Q先生は神秘主義の立場から作品を書いて相当の努力を示した。けれどQダッシ先生は相変らずリアリズム文学の立場で努力してゐた。」「やがて神秘主義の次に人道主義が問題にされだした。Q先生は直ぐに人道主義に没頭して、さういふ立場から評論や作品を書いた。それから間もなくQ先生は表現派に一生懸命になつた(。)」「ところが、その次に××イズムに、がらりと変つたのである。」「廿年前にこの二人の作家が恋愛した不幸な寡婦は、今は最早彼女の妹の息子の家に寄宿して年よりのくせに日本のプロレタリア小説の熱烈なファンである。」彼女は「Q先生の文学的行動には常に關心を持つてゐたのである。」「Q先生のさういふ豹変の動機がQダッシ先生に対する執念ぶかい反感から生じたといふ点を私は問題にしたいのである。」この老女は、Q先生がQダッシ先生との対抗上、相手よりも早く新しいイズムを先取りしなければならなかったことを力説し、「今度また何かの新しい文学理論が提唱され次第、無理にでもQ先生にその新しいイズムを遵奉させなくてはなりません」、「私とQ先生にとっては、文学のイズムは正直に文学のイズムではなくなつてゐます。恐怖です。せめて、かうしてゞも深刻を感じなければ、私たちは文学で人間修業したものとして何の特徴も持たないことになります。」と言う。

文学愛好の一老女(中)－或はイズム奇譚－

時事新報朝刊・17702号・5面・9月16日

文学愛好の一老女(下)－或はイズム奇譚－

時事新報朝刊・17703号・5面・9月17日

本文末尾に「(完)」とある。

10月

ハーシン先生＝創作＝

文芸春秋・10年11号（10月特別号）・pp. 322～334・10月1日（9月18日）・文芸春秋社・小峰八郎・50銭

本文末尾に「（前篇完結）」とある。＊「ハーシン先生は十四年ぶりにまた日本にやつて来た。今度もこの前と殆ど同じ事情から、たつた一人亡命して来たのであるが、今度こそもう絶対に故国に帰ることができないといふ身の上なのである。」彼は、「この前のとき彼が使つてゐたコックや女中をこの前と同じ給料で雇ひ入れたのである。」コックも女中も、十年余経っても、ハーシン先生に忠実に尽くそうとするが、旧友のバレンチン・バレンチア氏は、依託しておいたトルコのタッピーを横領してしまっている様子で、ハーシン先生が彼の自宅に交渉に出向いても、相手にしようとはしないのである。

佐藤春夫氏との一問一答＝五作家打診記＝ [4]

新潮・29年10号（10月号）・pp. 61～65・10月1日（9月24日）・新潮社・中根駒十郎・50銭

「佐藤春夫」（本文標題が「佐藤春夫」、目次には「佐藤春夫氏」とある）と改題して『田園記』（作品社・昭和9年5月15日）に初収録。＊佐藤春夫氏を訪ねるときは、たいてい友人の富沢有為男と一緒にでかける。今度も富沢と同行した。富沢に佐藤春夫の客間の見取り図を描いてもらうつもりだったが、美術品や玩具や器具類がおよそ百五六十もあるので、富沢は途中で投げ出してしまった。佐藤春夫は、大きな貝殻を灰皿に使っているの、その灰皿の吸殻の分量によって佐藤春夫のその日の様子や来客の数の見当がつく。不幸とか不遇と考えたのはいつのことだったか、同人雑誌時代のこと、谷崎潤一郎との出会いのことなどを佐藤春夫に質問した。

純文学の危機に就いて語る ＊座談会

新潮・29年10号（10月号）・pp. 140～162・10月1日（9月24日）・新潮社・中根駒十郎・50銭

出席者、杉山平助・小林秀雄・河上徹太郎・吉行エイスケ・伊藤整・井伏鱒二・雅川滉・川端康成・中村武羅夫。＊「純文学が滅亡するとかしないとか言はれてゐるやうな時でして、滅亡するかしんないかは別問題にしても、兎に角純文学の氣勢が揚がらない没落期にあると思ふのですが、それは誰が見る所もみんな同じだらうと思ひます。それで、純文学の、流行りの言葉でいへば、『非常時』に際して、若い、文学に専心してをられる方々が、どういふ風な考へ方をしてをられるか、純文学が今のやうに勢力がなくなつた原因は、どういふ所にあるか、それから、各自の考へ方として、どういふ風に純文学を發展させるやうな方法を講ずる

なり、或は努力するなり、どんな覚悟を持つてをられるかといふやうなことを、まあ伺ひたいと思ふのです、先づ、現在の純文学の衰退の原因といふやうなことから、考へて頂きたいと思ひます。」という座談会開催の趣旨を明らかにした中村の発言から始まる。なお、井伏の発言は、この座談会の流れを左右する種類の積極的なものは皆無で、全体を通じてもわずかに数カ所だけである。

#### 「途上」の作者

帝国大学新聞・447号・5面・10月3日

本文末尾に「(完)」とある。パラルビ。\*「嘉村礒多氏の『途上』が出版されたので、私は読みかけてゐた『ボールとヴィルディヌ』を途中で止して早速『途上』を読んだ。」この作品集の中で「『秋立つまで』は『途上』の結末篇とみなしていゝだらう。」「私が慨嘆しかつ研究したいと思ひのは、この作品の主人公の性情である。こんなにまで強力に、過去を現実の自己に蚕食させ、その蚕食された空隙に念願や後悔の観念を充填させようと必死になつてゐる人を私は滅多に知らないのである。誠実な悩みの積み重ねが化石したかのやうに、それはひ喩であるが、頑固な顔になつてゐる。」「嘉村氏は極めて高度な批判を自己に加へて、『途上』といふ仕事をなしとげたのである。」

#### とり残された森林(1) ⑨ [6.19.25]

都新聞朝刊・16125号・1面・10月12日

10月15日まで4回連載。パラルビ。(1)・(2)と、(3)の途中までを「戸山学校の森」の標題で『静夜思』(三笠書房・昭和11年8月15日)に初収録。\*「東京の街は低地のところや高みのところが平気で街になつてゐて、当然それは湿地や沼地になつてとり残されてゐる場所も、不潔で人通りの多い街になり、公園にすれば適当であると思はれる樹木の多い高台も少数の人の庭園になつてゐる。」戸山学校の裏に近所の人「箱根山」とよんでいる山がある。この山には雉や狐みたいな動物が生息しているが、彼らが逃げ出す暇もなく周囲に街が出来てしまつたのであろう。「私は若松町の下宿から騎兵連隊横の下宿屋に引うつり、それから騎兵連隊正門前の素人下宿屋に引越して、その次に喜久井町のお寺の境内の素人下宿に引越した。『箱根山』のぐるりを、五年間で一周する順序によつて下宿生活したわけである。」「そのころ雉はこの山に六羽ゐた。」「私が騎兵連隊正門前の下宿にゐたころ」、独歩の作品を真似て「下宿屋の息子は私に雉を捕りに行かうといつた。」彼は「独歩やワイルドを極力崇拜してゐた」のである。その息子は、矢田繁一といったが、去年死去した。「喜久井町の誓閑寺境内の素人下宿屋に引越してから、はじめて私は『箱根山』に登つてみた。」「私」の下宿していた家は崖下にあった。崖の上はすぐに墓地になつていて、雨が降ったりすると崩れ落ち、人間の骸骨が崖の面に露出するのである。箱根山は「山のなかにまぎれ込む」と、「急に、すべてが深山の気配であつた。」箱根山の西側には一條の窪みがあつて、まとまりのある溪谷になつてゐる。溝川が流れていて、小さな赤い蟹でもいそうである。(以上の部分が『静夜思』に収録されている)。付近のこども

たちは、姉と一緒に遊びに来るに違いない。「私」は彼女に声をかけてみる。「数日後、私は彼女が私と同じくお寺の境内に住んでることを知った。それから間もなく、私は彼女に結婚を申し込んだのである。」「今では早まったことをしてしまったと思ふが彼女の方でも迂濶に承諾して損をしたといつてゐる。」「けれどこのいきさつについては細かく述べたくないのである。単にこれだけのことを書いても、もしも彼女がこの随筆を読んだなら一波濫まぬかれないだらう(。)」「あなたの小説は随筆と同じやうです。随筆と同じ材料を小説に書くのは、題材が不足してゐるからでせう」などと批評する。「これでも私は素描のつもりで挿話を書いてゐる。幾つもの素描をこゝろみても、たゞ完成品にまとめることができないだけのことである。」「森は街の家なみで周囲を重くるしくとりかこまれ、この森のなかには雉や狐類や山鳩がゐる。これ等の動物は、森といつしよに周囲を家なみでとりかこまれてゐるわけであるが、まるきり同様な重くるしさで私も周囲を数多の不幸でとりかこまれて行つてゐる。孤独でたまらないのである。」

とり残された森林 (2)

都新聞朝刊・16126号・1面・10月13日

とり残された森林 (3)

都新聞朝刊・16127号・1面・10月14日

とり残された森林 (4)

都新聞朝刊・16128号・1面・10月15日

本文末尾に「(完)」とある。

<序> ★

『川』・江川書房(江川正之)・10月20日(10月15日)・<p.3>

永田龍太郎『井伏鱒二文学書誌<改訂増補版>』(永田書房・1985年5月30日)には、「あとがき」として掲出されているが、この書には「目次」がなく、また、本文にも標題は付されていないので、「あとがき」と命名する根拠は乏しい。ここでは仮りに「序」として掲出した。

【川】

江川書房(江川正之)・10月20日(10月15日)・菊判・越前産赤口局紙印刷著署名本2円50銭、上質紙印刷本1円50銭・中川一政装幀・<序>1p. 本文82p.

上記は日本近代文学館所蔵の第292部による。ノズルはない。なお、『限定出版江川書房月報』5号(昭和7年11月20日)の「『川』造本略記」によれば、「内容——川・川沿ひの実写風景・洪水前後・その地帯のロケーション四篇を改訂綜合して収む。／体裁——菊判変形型。／本文——総ルビ付五号活字使用、三十五字詰十三行八十二頁に組む。印刷は精興社。肉細の新五号活字は印刷インクの撰択

に俟って、鮮明麗朗実に快き印刷なり。／用紙 — 総頁数九十六頁。特製には局紙を、上製には上質紙を使用す。／表紙 — 中川一政氏快心の装幀になる木版四度刷の伊予砦紙装。／扉 — 水玉模様鳥の子紙に木版三度刷。／外箱 — 木版二度刷の特澆楮紙を貼る。／部数 — 四百部限定。自一号至二百号の二百部を著者署名入局紙本となし、自二百号至四百号の二百部を上質紙本とす。／定価 — 署名入局紙本貳円五拾銭・上質本壹円五拾銭。」とある。

<収録作品>

川

川沿ひの実写風景 「文芸春秋」昭6.9	pp. 1~16	洪水前後 「新潮」昭7.1	pp. 48~56
川 「中央公論」昭6.12	pp. 17~47	その地帯のロケーション 「新潮」昭7.5	pp. 57~82

因ノ嶋—瀬戸内海の旅—（上）＝随筆＝

信濃毎日新聞朝刊・18108号・4面・10月23日

24日に続載。パラルビ。\*「私は計画的に瀬戸内海の旅をしようと思つて旅行したことはない（。）」「瀬戸内海の一小部分をそれぞれ異なる季節に見聞して来たにすぎない。」「私」は秋の終わり頃の荒天の日に尾道から出た発動機船に乗って、因島の三ノ庄に着いて、ドックで働くペンキ職工と弁当を届けに来た若い娘の様子などを岡の上から見物した。「私はこの島に一週間ばかり逗留するつもりで出かけて行つたが、くつたくのないこの島の風物が気に入って、とうとう七ヶ月ばかり滞在してしまつた。」「私は七箇月ばかりその島に住んだ後、それから再び発動機船に乗つて尾ノ道に上陸したときには、自分はこれからどうすればいいのか見当がつかかなかつた。すつかりこの現実とかけはなれた生活をして来て、たつた今、現実につれ戻された人間と同じことであつた。」

因ノ嶋—瀬戸内海の旅—（下）＝随筆＝

信濃毎日新聞朝刊・18109号・4面・10月24日

本文末尾に「（了）」とある。

11月

車内での手もちぶさた＝随筆＝

モダン日本・<3巻11号>（通巻26号・11月特輯）・pp. 26~27・11月1日（10月5日）

・モダン日本社・大島敬司・20銭

総ルビ\*「私は郊外に住まつてゐるので市内に出かけるにはいつも省線電車に乗るが、電車のなかで自分の視線のやり場所に困ることがある。」正面の席に、人を馬鹿にしたような表情をして座っている美人とか、これみよがしに足を組んでいる妙齡の女性とか、毎日の通勤で疲れきつた様子をしている人がいるときには、目のやり場に困る。先日の午後、疲れた様子の勤め人と、美人型の女性とが睨み

合っているのに気がついた。「彼等の表情や目つきによれば彼等は互に相手に対して、お前こそ生意気で目障りだと言っているのと同じ有様であつた。」

高円寺スケッチ（高円寺風景）＝大東京十二夜物語＝

新潮・29年11号（11月号）・pp. 99～102・11月1日（10月24日）・新潮社・中根駒十郎・50銭

\*「私はこの文章を書くために街の自然からモデルをつかまへようとして、昨日の夜七時ころ、高円寺駅の自働電話のそばに立つてゐた。誰かこの街の散歩に慣れてゐるらしい人物を見つけて、その後ろからついて行ってみようといふ考へであつた。」「私」は、同人雑誌の話をしながら歩く二人の青年の後をつけて、喫茶店へ入った。その後「私」は、カフェ街へ行ってみた。

学生の街－早稲田書店街－

帝国大学新聞・453号・2面・11月10日

パラルビ。\*「私は学校を止してから永らく早稲田鶴巻町の下宿屋にゐて勤め口もなくして遊んでゐた。かういふ生活をしてゐるときには、たいていカフェに行くにも古本屋へ行くにも、特定の或る一つの店だけ行くものらしい。」「やはり私も特定の××堂といふ古本屋にだけ行つたのである。そしてその店のおやちさんと世間の景気とか町内の噂とかに関する話をしてゐた。」「今年の夏、雨の降る日に私はこの界わいへ出かけるついでがあつたので久しぶりにその店に寄つてみた。」店の入り口に置いてある本には雨がかけ、「青色の忘れることのできないガーネットのチェホフ全集が置いてあつた場所には『資本論』が置いてあつた。」「私は気をくさらせて雨にぬれながら歩いたが、それは学校が夏休みのときのことである。」「新学期になつて学生がこの街に一度に集まつて来ると、こゝはおびただしい数の学生たちが往来する市場に変化する。」

「川」の出版＝川＝

限定出版江川書房月報・5号・p. 1<通巻頁p. 31>・11月20日（11月17日）・江川書房・江川正之・<定価記載なし>

\*「今回の限定版『川』について細かい説明を加へやうとすれば、むしろさういふ気持ちを起すよりも私はこの作品のつづきを書きたくなつて来るやうなのである。けれどもこの作品は、これで完結してゐる。／私は無生物の川を主人公にしてこの作品を書いたが、なぜ書いたかといふ問ひに対しても、またどういふ目的で書いたかといふ問ひに対しても、その他あらゆる問ひに対しても私は貧しい一つの答へを持つてゐるにすぎない。その出来栄は別として、私は川のながれて行くへうべうたる姿を見とどけようとしたのである。しかし苦渋に充ちた幾つもの道具だてが、物語の形式を踏襲してゐる結果、私の期待を裏切つて、この川の沿岸に住む不幸な人たちを素描する目的であつたと思はれるかもしれないだらう。私はそれ以外の方法が見つからなかつたのである。」以下、装丁などにふれる。なお、無署名「『川』の改訂と校正」という記事が続いて掲載されていて、そこには改

稿の夥しさが伝えられている。

凄い男【一】－夜十二時過ぎに銭湯へ行く－

報知新聞朝刊・20072号・3面・11月22日

11月26日まで5回連載。パラルビ。\*「こなひだ私は夜の十二時すぎごろ銭湯に行ったが、お客は一人もゐなくて、浴槽の上には丸太の足場が架けてあつた。そしてペンキ屋が足場に載つかつて、壁のペンキ画を青い色の一色で塗つぶしてゐるところであつた。」番頭の言葉に従って、仕方なく「私」は女湯に入った。そこへ、もう一人の客が現われた。「分別盛りの年配になる男であつて、頭髪は近代好みの格好に散髪してゐたが、彼は腕や背中や股の部分にいつばいに彩色の刺青をしてゐたのである。」「その男の背中には一めんに、刺青の牡丹の花が咲きみだれ、こぼれた花卉の上には一びきの青い蜥蜴がゐた。」その男とは初対面であつたが、「おたがひにお湯から首だけ出して懇意らしく話をしたが、それはきつと私たちが禁制を犯して女湯にはひつてゐたからであらうと思はれる。」男は「私」を強引に誘ってタクシーに乗せ、「紛争移転等諸問題相談所」という看板の掛かった家へ連れて来た。男はこの家の主で、顔を出した美少女はこの男の娘らしい。男は娘を酒を買いにやらせた後、居合い抜きを見せる。「つきあひやうによつては、この人物は相当物凄いい男に違ひない。」と「私」は思った。

凄い男【二】－背中一めんに開いた牡丹－

報知新聞朝刊・20073号・3面・11月23日

凄い男【三】－無理やりに私の腕を捉へて－

報知新聞朝刊・20074号・3面・11月24日

凄い男【四】－美しいが心配さうな少女の顔－

報知新聞朝刊・20075号・3面・11月25日

凄い男【五】－いきなり叫んで刀を抜く－

報知新聞朝刊・20076号・3面・11月26日

12月

人間孤独の図＝創作＝

近代・1巻2号（12月号）・pp. 200～207・12月1日（11月23日）・国際電報通信社『近代』発行所・松井休暢・35銭

本文末尾に「（完）」とある。総ルビ。\*「私の知つてゐる洋画家野田伝吾は私とあまり仲よくなかつたが、彼はフランスに行つたきり日本に帰つて来ない。」七年前に渡仏したのだが、後援者の近藤氏が急に没落して二年前から送金が途絶

えている。食費にも事欠き、絵の勉強を止してしまった彼は、「純情を失ひ絶望したまゝの状態」で日本に帰ることは到底できない、については近藤氏の近況を調べてほしいという手紙を「私」に寄越す。面倒な依頼に、「私」は、近藤家の女中頭のヨネヤの許に近藤氏の近況を尋ねる手紙を出すことにした。すると、ヨネヤから早速、返信が来た。近藤氏は、後妻の貞操問題が新聞にすっぱ抜かれて、懊悩の末に発狂し、自殺してしまい、今は娘のマキ子とヨネヤの二人だけで暮らしているという。そして、野田に是非お願いしたいことがあるという。「私」は、「私」が野田に手紙で用件を取り次いでも、また、ヨネヤから野田に直接手紙を出してもよいだろうとヨネヤに返事を書いた。すると、ヨネヤからマキ子を野田と結婚させたいから尽力してくれという手紙が帰って来た。「私」自身にもなぜそんなに腹を立てたのか分からないが、野田には近藤氏の発狂とその死を伝えるだけの手紙を書き、ヨネヤには野田に必要なことだけを記した手紙を出したと伝えた。それから三ヶ月ばかり後、「私」のところを訪れたヨネヤは、野田からは一切音信がない、自分たちは見捨てられたのだろうと言いながら、近藤夫人が出奔した当時の状況を話して聞かす。

#### 疑似女性相談 [4]

福岡日日新聞朝刊・17667号・10面・12月2日

総ルビ。『田園記』（作品社・昭和9年5月15日）に初収録。\*「質問」と「答」という、女性からの身の上相談とその回答という形式を採る。「（質問）」は、Y温泉場へ新婚旅行に出たところ、部屋を間違えて隣室の客と一夜を過ごしてしまった、どうすればよいかというもの。「（答）」その悲しさはお察しいたしますが、どうしたらいいか私にもわかりません。（筆者）」。

#### 小林秀雄氏著「続文芸評論」＝新著合評・文芸＝

読売新聞朝刊・20041号・4面・12月2日

評者として、井伏鱒二・小野松二・中村武羅夫の名が掲げられている。\*「まことに凜とした評論集であると信じます。随筆風のものや感想風のものなど。短い評論がたくさん載つてゐますから、評論のさまざまな様式を知ることでもあります。率直に鑑賞し率直に表現してゐる小林秀雄氏の態度に注目すべきだと私は考へます。」以上井伏文全文。

#### 霧の夜＝こんと・ばれいど＝

サンデー毎日・11年58号・p.5・12月18日・大阪毎日新聞社・荒木利一郎・12銭

中野修二・挿画。パラルビ。\*「私は極度の屈託ごとがあつて、独りぼつちの気持で歩いてゐたのである。」交番の前を通りかかったが、巡査は「私」を誰何しようとはしなかった。「私」は「むしろ誰何され、荒つぱく早くうちへ帰らないかとでもいつてもらひたかつた。」横丁に曲がろうとしたとき、曲がり角からよほど酩酊した職人風の男が自転車を押しながらやってくるのに出会った。電柱にぶつかったのを見た巡査は、その男に声をかける。男を相手に巡査は尋問を試み



ているのを見ながら、「私」は帰途につく。その途中、先ほどの男の姉が開店したばかりだと言っていた、青物屋の前を通る。女主人の表情には、開店当日の意気込みが満ち溢れていた。

【小説・エッセイ】

神戸雄一編・朝日書房（川崎及敬）・12月25日（12月15日）・215mm×145mm・目次3p.  
本文351p.・2円

井伏鱒二「自分への吟味」（初出「自分への吟味 — 新しい文学に対して — 」  
（『時事新報』朝刊・17276号、17277号・昭和6年7月15日、16日）を収録（pp.3  
～5）。本書は『ヌウヴェル』第1輯（朝日書房・昭和7年9月1日）の紙型をそのまま  
使って標題のみを改題したもの。「後記」なども全く同一である。横光利一  
「一つの感想」、井伏鱒二「自分への吟味」、田畑修一郎「バルザック学」、井  
上友一郎「表現形態に関する覚書」、織田正信「ディッケンズの再批判」、今官  
一「時の査証」、蒔田廉「小説に於けるリズム」、久野豊彦「谷崎潤一郎氏のエ  
ロチズム」、龍胆寺雄「ロマン論」、大鹿卓「寝台」、神戸雄一「潭水氏の強  
力」、古木鉄太郎「郊外の住ひ」、中山義秀「低空」、大野淳一「聖書とその夜」、  
田村泰次郎「羽根の話」、小田嶽夫「写真」、塩月赳「海風」、高橋新吉「女と  
拳闘家」、河田誠一「浪の雪」、北村謙次郎「青葉を揺る風」、北原武夫「明暗」、  
金子光晴「センブロン河」、小野松二「宮木先生」、辻野久憲「二つの人生」  
（バルザック）、宮腰武助「バルザック」（テイボウデ）、守木清「ダヴィズム  
の追憶」（トリスタンツアラ）、中山省三郎「ゴンチャロフ」（メレジコフスキ  
ー）、青柳瑞穂「マルドロオルの歌」（ロオトレアモン）、那須辰造「アンタレ  
ス」（マルセル・アルラン）、秋田滋「パイプ」（フランシス・ジャム）、塩月  
赳「事業家」（バルザック）、以上収録順。

【世界ユーモア文学全集】第11巻日本篇

改造社（山本三生）・12月31日（12月26日）・四六判・目次2p. 本文410p.・予約定価  
1円20銭

井伏鱒二篇には「朽助のゐる谷間」（pp.290～332）、「ジョセフと女子大学生」  
（pp.333～352）を収録。佐々木邦篇（「若さま」・「豪い人の話」・「嘘」）、  
辰野九紫篇（「青バスの女」・「ホッペの習作」・「失業相合傘」）、寺尾幸夫  
篇（「お驢馬さん」・「鯛ちり」・「無産結婚」・「お裁縫と映画（高女物語の  
一節）」）、中村正常篇（「結婚物語」・「二人用寝台」・「愛は地上の建設」）、  
井伏鱒二篇（「朽助のゐる谷間」・「ジョセフと女子大学生」）、横溝正史篇  
（「山名耕作の不思議な生活」・「富籤紳士」）、以上収録順。

§ 昭和8年（1933）

1 月

花たば＝小説＝

若草・9巻1号（新春特輯号）・pp.40～46・1月1日（昭和7年12月10日）・宝文館・藤村耕一・40銭

総ルビ。＊「まだ経済学部二年の学生であるが、私を友達あつかひにして」いる「多田房吉は、彼の結婚する相手と、歌舞伎芝居の劇場で見合ひをするとき、無理やり私に付添ひの役を引受けさせた。」予定の仲介者が病気で外出できないというのである。滞りなく見合ひは終わったずなのに、翌日、「意外にも房吉は意気消沈して私のところにやつて来た。」「房吉の言ふところによると、この結婚は駄目にしなければいけないさうである。」仲介に立った吉村という男は家作を何十軒も持っている。その一軒に、房吉が見合ひした相手の母子二人が二三年前まで住んでいた。家賃を滞納したので追い出したのだが、家賃を払ってもらいたい吉村は、婿を世話してやるから結納金で家賃を払えと言ったのだという。事情を知った房吉は、不愉快でたまらないと言って、大学の試験が済むと田舎へ帰ってしまった。その日の午後、よほど歩き回ったらしく、「鑑賞用の花器として全く面目を失つてゐた」「温室咲きの鉄砲百合の花束を持って」、房吉の結婚相手とその母親は「私」の家を訪ねて来たのである。

<無題>＝広島県・のろまで賢いおらが国＝ ＊アンケート回答

人情地理・1巻1号（1月創刊号）・p.138・1月1日（昭和7年12月14日）・武侠社・八柳吉次郎・80銭

「A…長所／B…短所」というアンケート項目が掲げられている。「A 村長になりたい人が幾人もゐて、その結果しよつちゆう悶着が起つてゐる村ですが、腹を立て、村を飛び出して行く人もゐないやうです。模範にしたい気質もありません。みんな、ぼろい話はないものかと考へながら、耕作してゐるらしいと思はれます。／B 悪口を云ふのは止ませう。恨まれますから。」以上井伏回答全文。

<無題>＝ファツシヨと共産党の実勢力検討／ファツシヨか共産党か＝ ＊アンケート回答

近代・2巻1号（新年特大号）・p.23・1月1日（昭和7年12月19日）・国際電報通信社『近代発行所』・松井休暢・45銭

「質問」として「ファツシヨと共産党に対する御寸評を乞ふ」とある。＊「ファツシヨも共産党も小生は知りません。さて光陰矢のごとし。」井伏回答全文。

エスムラルゼなど＝作品中の興味ある主人公＝ ＊アンケート回答

文芸首都・1巻1号（創刊号）・p.56・1月1日（昭和7年12月20日）・文学クオタリイ社・保高德蔵・25銭

目次には「エスムラルダなど」とある。＊「もしも実在の人物ならば会つてみたいといふ興味とか、それからひとつ非難してやりたいといふ興味とか、尊敬した

いとか、興味にもいろいろ種類があると思ひますが、（、）たとへばエス・ムラルダのやうなジプシーをんなの性格にも私は魅力を感じますが、その『ノートルダム・ドゥ・パリ』といふ作品はあまり好きでないと思はれる気持でたいへん矛盾してゐるのに自分で気がつきます。フロレンスの画家たちの描いた聖母マリヤのやうな女性も好きです。その反対の傾向を示してゐるをんなも好きです。」以上井伏回答全文。

言葉について＝創作特輯十二篇＝ ① [3. 14. 23. 28. 29]

新潮・30年1号（新年号）・別p. 106～114・1月1日（昭和7年12月20日）・新潮社・中根駒十郎・60銭

本文末尾に「（完）」とある。文芸復興叢書『逃亡記』（改造社・昭和9年4月20日）に初収録。

野球試合の記 [4]

文芸汎論・3巻1号（新年号）・pp. 44～45・1月1日（7年12月20日）・文芸汎論社・岩佐東一郎・20銭

本文末尾に「（十一月二十一日）」とある。『田園記』（作品社・昭和9年5月10日）に「素人野球試合の記」と改題して初収録。『田園記』所収本文末尾には「（七年十一月廿一日）」とある。＊「十一月十三日午後、荻窪野球チームは阿佐ヶ谷、麒麟混合チームと試合をして、私の属する荻窪チームの勝ちになった。スコアは九対二である。」この野球試合のことを、各人の様子を描きながら記す。

風貌・姿勢（五）＝随想＝ ⑨ [2. 6. 19. 24. 25. 33. 39. 41. 58. 59. 71]

作品・4巻1号（33号・新年号）・pp. 46～49・1月1日（昭和7年12月24日）・作品社・駒沢文一・40銭

内容は、三好達治・河上徹太郎・深田久弥の三人を対象にしたもので、それぞれ冒頭にゴチック体で小見出しがある。『随筆』（椎の木社・昭和8年5月31日）に初収録。再録書の内[41]は「河上徹太郎」のみ。また[41]の本文末尾には「（昭和五年）」とあるのは誤り。[59]には「三好達治」、「河上徹太郎」を収録。

書きため＝今年のプラン＝

大阪朝日新聞朝刊・18377号・7面・1月3日

総ルビ。＊「べつだん珍しい計画も見つからないやうです。書きたいと思つてゐる材料についていへばいゝかもしれませんが、材料といふものはいろいろの意味でたとへば咽喉の渇してゐる人間におけるコップの水のやうなものです、第三者にとっては興味のない品ものだらうと思はれるので、こゝではその方面の計画は述べないことにします。」「今度から私はしきりに原稿の書きためを試みようといふ計画」です。

豊伍君の失策＝めでたい話（A）・文芸＝

大阪朝日新聞朝刊・18385号・7面・1月11日

13日まで3回連載。パラルビ。\*「私の友人山本豊伍は、このごろ酒を飲みすぎる。」  
「彼は最近、私のうちの直ぐ近くに引越して来て、」「私」を飲み連れて行こうとする。先日も、誘われて「カフェ・タンタンといふ極めて粗末な酒場に行つた。夜中に帰る途中、パンの製造所で働いている職人を見た豊伍君は、酔った勢いで職人たちの間に強引に割り込んで、結局夕方までメリケン粉をこねていたという。

豊伍君の失策＝めでたい話（B）・文芸＝

大阪朝日新聞朝刊・18386号・7面・1月12日

豊伍君の失策＝めでたい話（C）・文芸＝

大阪朝日新聞朝刊・18387号・7面・1月13日

本文末尾に「（終）」とある。

見算ちがひ

都新聞夕刊・16220号・3面・1月16日

挿画・碓伊之助。パラルビ。本文末尾に「（終）」とある。「法律学の著述を仕事にしてゐる草浦君は、私たち二人の共同事業で金儲けしようといふ相談を私のところに持つて来た。」草浦君宅の家主が死んでしまい、家主の権利を主張する三人の男が現われた。そこで、草浦君は、借家の権利を誰かに売ろうというのであった。「私」は、草浦君を、「私」の知り合いで一番欲張りだと思われる金融業の古山四郎吉に紹介した。ところが、実は、その係争している三人の一人が古山だったので、草浦君は古山に、やりこめられてしまい、とんだ見当違いだったのである。

大事なこと・部分的なこと

あらくれ・3輯・pp.4～5・1月28日（1月25日）・秋声会・徳田一穂・5銭

\*「私は一ぱん大事なことを忘れることが多いので、書いてしまつてから半年もたつた後でそれに気がついたりして、はづかしい思ひをすることがある。」「そのくせ私は、他人の仕事に対しては案外に細かいところにまで詮索だてして、芝居見物するときでももしかつめらしく演技を見たりするのである。そして大事なことでないと思はれる箇所をひどく気にして、物足りない気持ちになつたりすることがある（。）」築地小劇場や演舞場でもそういう経験をしたし、外国の名画を見てもそうだった。細かいところに神経が行き届いていないと、そこが気になるのである。なお、『あらくれ』は昭和7年7月に創刊され、昭和7年9月に第2輯が発行されている。昭和8年に入ると通巻第3号（1月）、第4号（5月）、第5号（6月）、第6号（7月）が発行される。そして、半年の空白を置いて昭和9年2月には奥付に「第二巻第一号」と記された通巻第7号が発行され、以降ほぼ継続的に刊行される。この「第二巻第一号」と記された奥付を見る限りは、発行者側の認識では創刊か

ら昭和8年の通巻第6号までを第1巻あるいは第1次と見なし、昭和9年2月発行の通巻第7号から第2巻あるいは第2次が始まるとしているようである。第1巻を単純に創刊年から数えると混乱する。たとえば、十文字隆行氏の調査報告「雑誌『あらくれ』目録・解題」（『昭和文学研究』11集・1985年7月）では、2巻1号から2巻4号までが重複することになる。本著作年表稿では昭和8年までに発行されたものについては、通巻号数を表示し、昭和9年以降発行分については、奥付等に従って巻号の表示をする。

口ぐせのクロツキイ＝ドーカと思ふ話（七）＝

東京朝日新聞朝刊・18402号・7面・1月28日

パラルビ。＊「A君といつしよに散歩してゐると、A君はコンクリート製の大きな門柱を見て、彼がこのごろ口ぐせの『おかしくって！』といふ冷笑のつぶやきをつぶやいた。」彼は何度も「おかしくって！」という台詞を口にする。「A君は気難しい男である。」

2月

女人来訪＝創作＝ ① [3.16.27.28.29.31.38.47.57.62.64]

文芸春秋・11年2号（2月号）・pp.284～296・2月1日（1月18日）・文芸春秋社・小峰八郎・40銭

本文末尾に「（完）」とある。文芸復興叢書『逃亡記』（改造社・昭和9年4月20日）に初収録。

石地蔵 ＊詩 ⑨ 自⑧ [2.9.15.17.21.22.30.34.37.40.49.51.55.60.61.68.69.71.72.77.79]

尺牘・＜1号＞（壺）・p.8・2月1日（1月20日）・椎の木社・百田宗治・20銭

『読売新聞』朝刊・19354号（昭和6年1月10日）掲載の「石像」の改題改作と見なし得るが、大幅に手が加えられているので、再録書を掲出した。[22]『随筆』（椎の木社・昭和8年5月31日）には「自序にかへて」として収録。

書画骨董の災難 ⑨ 自⑧ [4.18.26.33.41.42.54.65.76.78]

大阪毎日新聞朝刊・17876号・7面・2月5日

パラルビ。『東京日日新聞』朝刊・20304号（昭和8年2月17日）にも掲載。『田園記』（作品社・昭和9年5月10日）に初収録。『田園記』所収本文末尾には「（八年二月）」とある。

書画骨董の災難 ⑨ 自⑧ [4.18.26.33.41.42.54.65.76.78]

東京日日新聞朝刊・20304号・8面・2月17日

パラルビ。『大阪毎日新聞』朝刊・17876号（昭和8年2月5日）にも掲載。『田園

記』（作品社・昭和9年5月10日）に初収録。『田園記』所収本文末尾には「（八年二月）」とある。

### 3月

平和な近所となり（A君の場合）＝随筆＝

モダン日本・4巻3号（3月号）・pp. 15～16・3月1日（2月5日）・モダン日本社・大島啓司・20銭

総ルビ。＊「私の友人（仮りにA君といふ名前にするが）A君は、もうせんから近所の人たちに左翼だと誤解されて、たいへん独りぼっちである。失職同様の身の上で、田舎の土地を売り食ひしながらぶらぶらしてゐるので、さう思はれるのだといつてAの細君は愚痴をいふ。」引越してはどうかと言っても、「近所の人たちの疑念を晴らしてからでないと立ちのくことはできない、意地なんだといふ。」A君夫婦は工夫を凝らす、近所の人々の疑いは晴れないままだという。「なぜA君は思ひきつて引越さないのだらう。気がしれない。」

せめてもハンネスの最後の義務（寂しき人々）＝男ごころ・女ごころ＝

新潮・30年3号（3月号）・pp. 65～66・3月1日・（2月24日）・新潮社・中根駒十郎・50銭

＊ハウプトマン「寂しき人々」に登場する「ケエテ・フオツケラアト」の身になって、「『私はもしもケエテ・フオツケラアトが私であつたなら、あの場合どんな解決をしたいか？』について述べることに」した文章。しかし、「面目ないが、私には解決の見当がつかかねるのである。」

### 4月

掏摸の棧三郎＝奇妙な交友録＝ ① [3. 11. 20. 31. 35. 38. 40. 43. 48. 60. 68]

文芸春秋オール読物・3巻4号（4月号）・pp. 190～198・4月1日（3月3日）・文芸春秋社・菊池寛・50銭

挿画・吉田貫三郎。総ルビ。文芸復興叢書『逃亡記』（改造社・昭和9年4月20日）に初収録。

父親＝小説＝ [8]

セルパン・26号（4月号）・pp. 24～25・4月1日（3月15日）・第一書房・長谷川巳之吉・10銭

本文末尾に「（完）」とある。『集金旅行』（版画荘・昭和12年4月20日）に初収録。＊「私たちの好いてゐた女子聴講生の八木サキコは、フランス語の試験のとき男子聴講生の柿崎天一のために答案をごまかした。」やがて、天一は「私」の下宿に引越して来た。「柿崎天一は午後五時から病院に勤めて、昼間はフラン

ス文科の聴講生になつてゐたのである。」ある日「私」が下宿に帰ってみると、八木サキコが天一のところを訪ねて来ていた。話の様子では、二人は実の親子であるらしい。このとき、二人の会話は円滑には行かなかったが、天一は「父親らしく娘と常套的な会話をするほど平和な気持であるに相違なかった。」「おそらく柿崎天一は、よほど前に或る律気な女性を相手に間違ひを犯して、その相手の女性も天一も今までお互に気を悪くしてゐるのであらう。」「八木サキコが学校を止すと、つゞいて柿崎天一も教室に出なくなつた。そして天一は私の下宿を出て、正式に病院に勤めることになった。八木サキコは吉田サキコといふ名前で詩を書いてゐたが、最近では洋画を習つてゐるさうである。」「私が彼女を青バスのなかで見たときには」、「おはなしにならないほど彼女の容貌は年よりになつてゐた。しかし私は青バスを降りてから、彼女のその引き眉もなつかしくてたまらないと思つた。」

実費診療院＝ユウモア短篇集＝

新潮・30年4号（4月号）・pp.25～28・4月1日（3月23日）・新潮社・中根駒十郎・50銭

\*「ジフテリアの疑ひがあるといふので私は病院に連れて来られた。実費診療外科内科専門といふ小さな病院で、病院の入口にもベッドのシーツにも薬瓶にも『実費診療』といふゴム判がおしてあつて、一目で入院費が安いことがわかるやうになつてゐる。」「この付近一帯の街や気風は、あまり上品ではないらしい。」「私が入院した日の夜」、死人を連れて来た者たちがいた。看護婦の言うところによると、埋葬費がないのでこの病院に死体を捨てていったのである。「昨日も一人の患者が入院したが、それは盲目のくせに酔っぱらつて、橋から落ちて腰の骨を砕いた患者であつた。入院して一時間もたつと死んでしまつた。」この酔っぱらった患者は、付き添つて来た職人風の男と言い争ひすらししていたが、手術台の上で目を閉じて眠つたまま、息を吹き返さなかった。「どうやらこの付近の街は荒れてゐるやうだ。私のジフテリアは恢復しつつあるが、こんな病氣は、ここでは病氣のうちにはいらぬやうな気がする。」

5月

実説オランダ伝法『金水』 ① [10.11]

文芸春秋オール読物・3巻5号（5月号）・pp.424～437・5月1日（4月3日）・文芸春秋社・菊池寛・50銭

鶴屋幽蔵名義。挿画・松村亥太。総ルビ。本文末尾に「（完）」とある。424頁は標題と著者名及び挿画者名のみで、作品そのものの本文は425頁から始まる。「おらんだ伝法金水」と改題して、『火木土』版画荘文庫29（版画荘・昭和13年1月20日）に初収録。

修学旅行＝惜春賦＝

婦人世界・28巻5号（5月号）・pp.93～95・5月1日（4月13日）・婦人世界社・山本重彦・30銭

総ルビ。＊「こないだ尾道市の女学校の生徒九十七名が、国語教師の今井篤三郎先生に引率されて東京見物に来了。今井篤三郎先生といふのはかねがね私と昵懇の間がらで、私は篤三郎先生を東京駅に出迎へに行つたのである。」「私は篤三郎先生を街に連れ出さうとして機会をねらつてゐたが、先生に面会を求めて来る訪問客がひきもきらずといふ有様」であつた。「面会に来る人たちは、必ずこの先生に教へてもらつた卒業生であつた。最後に訪ねて来たのは、「女流作家の林芙美子といつて、やはり篤三郎先生に教はつた人である。」「修学旅行に来了生徒たちは、年来の希望である東京見物ができて満足してゐたものと思はれる。」

望遠鏡＝感想・随筆＝

新潮・30年5号（5月号）・pp.103～104・5月1日（4月23日）・新潮社・中根駒十郎・50銭

＊「このごろ私は望遠鏡に凝つてゐる。」「私の懇意にしてゐる画家の片中君は、このごろ直径九寸の凸面レンズをつくつてゐる。」「天体を観測していると、「宇宙の節理を感覚するといふ通念に没入することができるやうに思はれる。」「けれども私は星を観測した後では、いつものさう思ふ癖が強くなつて、もう勉強なんかしても自分はつまらないといふ氣持になつてしまひ、痛切に自分の存在がうとましくなるのを感じる。」「片中君は望遠鏡で天体を見た後では、たいてい、彼のアパートの屋上に出て、やはり望遠鏡で遠くの人家を見ることにしてゐる。」「天体を観測した後、私たちの興奮状態を鎮めるには便利なことかもしれないだらう。」「私は望遠鏡で十八里も二十里も遠方の人家を見たいと希望してゐる。」  
そうすれば、「ちつとは私も人間を好きになることができるかもしれないのである。」

故人に関する記

文芸首都・1巻5号（5月号）・pp.12～14・5月1日（4月28日）・文学クオタリイ社・保高德蔵・30銭

本文末尾に「（四月十二日）」とある。「小島勗氏が逝くなつて、つゞいて佐左木俊郎氏が逝くなつた。あいにく私は入院してゐたので追悼会に行くこともできなかったが、こゝに両氏の生前における風貌を述べて哀悼の意を披瀝する方便としたい。」たまたま佐左木君と一緒に映画を見る機会があつたが、場面が「悲嘆のところになつて来ると、佐左木君は本当に泣きはじめて、しきりにハンカチで涙を拭き、たうとう『わあ』と声を出して泣きはじめた。」「佐左木君は素朴で且つ熱情のある人であつた。」「小島勗氏は長いあいだ病気で苦しんでから逝くなつた。その最後のときまで親しくしてゐた富沢有為男は、以前からの私の友人であるが、私は直接に小島君の病中のことは知らないの、富沢有為男の述懐を



こゝに記してみる」として、時々漏らした富沢の言葉を記す。井伏は次のような富沢のこぼれを最後に引用している。「たうとう小島君、気の毒なことになった。かうなつてみると、幾ら蹴いたつて残るのは仕事だけだ。よくも悪くもそれだけのこと」

釣鐘の音に関する研究＝随想＝ ⑨ 自⑧ [5.18.26]

あらくれ・4号(5月号)・pp.14～15・5月5日(5月1日)・秋声会・徳田一穂・15銭  
本文末尾に「(この章つゞく)」とある。冒頭第一段落「私は釣鐘に関する研究を発表しようと思ふが、私の研究といふのは、釣鐘を蒐集したり半鐘に穴をあけてそれを手あぶりに代用したりする考証家たちの好むやりかたではなくて、単に梵鐘の音色はどういふ音で鳴りひゞくかといふことを私は主として記録したいと思ふ。」と、末尾の一文「私は最初に、私が田舎で子供のときからきゝなれた晩鐘について述べることにしよう。」を削除の上、「釣鐘の音」の冒頭部分として『肩車』(野田書房・昭和11年4月5日)に初収録。奥付の上部に掲げられた徳田一穂(署名は「一穂」とのみ文末にある)の「『あらくれ』の記」に、「丁度去年の五月三日の夕方皆さんが集つて、何か雑誌のやうなものを出さうと云ふ事で、それから出来上つたのが、『あらくれ』と云ふパンフレットである。さうしてまる一年の間に第三輯までしか出なかつたのは大へんに残念な事だと思つてゐたところ、四月三日の集りの夜、これからは表紙を付けて、なるべく雑誌風なものにして、とに角月に一回づつ出さうではないかと云ふ相談が纏つた。」云々とある。

晩春の一夜＝日曜日のページ＝

大阪朝日新聞朝刊・18507号・5面・5月14日

挿画・田村孝之介。パラルビ。本文末尾に「(完)」とある。「飛行会館の築地座上演の芝居を」見て、「あまりに興奮しすぎた」「私」は、「その帰りに夜おそくまで銀座を歩きまはつた。」「さうして銀座裏の或るカフェの前で、私はかねがね呢懇にしてゐる文科大学生山本豊平が洋装の可愛らしい少女と立ち話をしてゐるのを見つけた。」彼女は失業者で、カフェを紹介してくれというのである。豊平はその美貌に心惹かれたのか、「私」も一緒にタクシーに乗せて、目当ての喫茶店に連れて行く。ところが、その豊平が当てにした喫茶店は閉じたままで、少女はタクシーの中で眠ってしまっている。事情を察したタクシーの運転手が自分の妻の店に彼女を連れて行って一件は落着いたのだが、豊平は何だか割り切れない気持だという。

鯨【1】 [4.18.26]

報知新聞朝刊・20246号・5面・5月18日

5月20日まで3回連載。パラルビ。『田園記』(作品社・昭和9年5月15日)に初収録。『田園記』所収本文末尾には「(八・五・一四)」とある。\*「クデラがお産をするときには波の荒くない海岸に泳いで来て、そこの浅瀬を天然の産褥とする」。山口県の瀬戸内海沿岸にもそうした浅瀬があるそうだが、「私が見たのは、

山口県のその海岸に出て来るクヂラではなくて、そこから数十里も隔たるある小さな島の海岸に到来した大クヂラであつた。」「この島のものはこのクヂラを利用して一つ大いに稼ぐつもりであると顔役はいつた。付近の島や、陸地の人たちにこの未曾有の出来事を広告して、クヂラを見物に来る人たちから観覧料をまうけたいといふのである。」村人たちは相談会を持ち、用意周到な設備が施された。「私は顔役の切なる依頼によつて、地方新聞に掲載するクヂラの広告文を書くことになった。／『ところでクヂラは二千トンくらゐの大クヂラ、潮は五百尺も吹き上げると文章に書いてください』／顔役はさういつて、うれしそうにして帰つて行つた。」

#### 鯨【2】

報知新聞朝刊・20247号・5面・5月19日

#### 鯨【3】

報知新聞朝刊・20248号・5面・5月20日

本文末尾に「（五・一四）」とある。

#### 不幸の速力

マツダ新報・20巻5号（5月号）・pp.36～39・5月20日（5月15日）・東京電気株式会社・米山清三・35銭

本文末尾に「（完）」とある。パラルビ。39頁には「遅い訪問」（『三田文学』〈第2次〉3巻7号・昭和3年7月1日）冒頭部分が、「——井伏鱒二作『遅い訪問』より——」として掲載されている。『マツダ新報』については、井伏鱒二「田中さんのこと」（『すばる』1970年6月。のち「田中貢太郎先生のこと」と改題して、筑摩書房増補版全集第14巻、新潮社版自選全集第10巻等所収）に、田中貢太郎がこの雑誌の編集をしていたことが述べられている。＊「ながいあいだ失職してゐた崎野半太は、やうやくのことで地方の女学校に就職口を見つけて、友人たちに盛大な送別会を催してもらつた。」その席で、興奮した恩師の高田先生や友人たちは、かれらがその場で着ていた洋服やネクタイを贈った。「崎野半太は無事に田舎町の女学校に赴任したが」、寄せ集めの服装で来たことを暴露する落書きのために、「半太は上衣とズボンとをぬいで一時間だけ講義すると、こつそり学校を逃げだして、それから東京にまひもどつて来た。けれど彼は盛大な送別会をしてもらつた手前、恩師の高田先生にも友人たちにも合はず顔がないと考へて、しばらく誰にも会はないことにした。ますます彼は暮しむきに困るばかりである。」

#### 仔犬のこと

四季・1冊（1933年春号）・pp.94～100・5月20日（5月15日）・四季社・堀辰雄（日下部雄一）・1円50銭（特製3円）

94頁には井伏鱒二の名前だけが記され、本文は95頁から始まる。＊立野信之から、去年の夏「テリア種の灰色の牝犬で」マユという名の犬をもらった。「立野君は

プロレタリア文学運動に仲間入りしてゐるため、来年になると二年くらの刑期で牢に行くやうになつてゐるので、惜しくはあるが犬を手ばなさなければならぬといふのである。」犬小屋などを準備しようとしていたところが、立野君の奥さんがマユのことをあきらめきれないので、返すことにした。それを申し訳なく思った立野君は、今年の四月になってマユが仔犬を生んだので、一匹くれるという。しかし、その仔犬は雑種だというし、「私」は猫を飼いたいと思うのである。

# 自序に代へて ★

『随筆』・前付pp. 6～7<ノンブルなし>・5月31日（5月27日）・椎の木社（百田宗治）・1円

『読売新聞』朝刊・19354号（昭和6年1月10日）に「石像」として初出、『尺牘』第1冊（昭和8年2月1日）に改作の上「石地藏」と改題して再掲。この「石地藏」を「自序に代へて」として掲載。

## 【随筆】

椎の木社（百田宗治）・5月31日（5月27日）・菊二十取判・三好達治「序」2p.・「自序に代へて」2p.・目次2p.・本文70p.・200部・定価1円

『本』2号（昭和8年6月30日）巻末広告には、「菊二十取判本 薄鼠特漉紙 表紙鳥の子紙輪子 本文八十頁 二百部限定 価一円」とある。

### <収録作品>

日本漂流民 「作品」昭7.8	pp. 12 ～ 29	小野松二 「作品」昭5.11	pp. 52 ～ 55
鞆ノ津所見		蔵原伸二郎 「作品」昭5.11	pp. 55 ～ 60
鍛冶屋の町 「古東多万」昭6.9	pp. 30 ～ 34	三好達治 「作品」昭8.1	pp. 60 ～ 62
青瓊玕 「文芸春秋」昭7.5	pp. 35 ～ 42	河上徹太郎 「作品」昭8.1	pp. 62 ～ 64
風貌姿勢		深田久弥 「作品」昭8.1	pp. 64 ～ 65
堀辰雄 「作品」昭5.8	pp. 43 ～ 45	田園記	
中村正常 「作品」昭5.8	pp. 45 ～ 47	ウシトラ様 「作品」昭6.3	pp. 66 ～ 71
小林秀雄 「作品」昭5.8	pp. 47 ～ 48	龍王様 「作品」昭6.3	pp. 71 ～ 73
今日出海 「作品」昭5.10	pp. 48 ～ 50	七月一日拝見 「文芸都市」昭3.8	pp. 74 ～ 80
永井龍男 「作品」昭5.10	pp. 50 ～ 52		

6月

釣鐘の音に関する研究＝随想＝ ⑨ 自⑧ [5.18.26]

あらくれ・5号(6月号)・pp.19～20・6月5日(6月1日)・秋声会・徳田一穂・15銭  
本文末尾に「(この章つゞく)」とある。「釣鐘の音」の内に「私の田舎の鐘の音」の小見出しを付して、『肩車』(野田書房・昭和11年4月5日)に初収録。

鸚鵡の籠＝女読むべからず・コント二重奏＝

サンデー毎日夏季特別号・12年27号・pp.70～74・6月10日(6月2日)・大阪毎日新聞社・荒木利一郎・20銭

本文末尾に「(完)」とある。二段組の下段に掲載。パラルビ。\*「私は某新聞社から『女読むべからず』といふ題を与へられて一篇のコントを書くやうに命令されたが、かういふ規定のもとに文章を書くのは私の才能では容易なことではなくて、私は思案にくれてゐた。」「こんなに色彩のつよい見出しを冒頭<sup>マウ</sup>つける運命にあるときには、私たちの脆弱な文章はどんなに加工してみても影が薄いものになつてしまふ」上に、「私」が書きたいと考えついた挿話が「私」の尊敬する婦人に関する気の毒な話だからである。あるとき、その女性が、泥棒に入られたと言つて「私」のうちに駆け込んできた。「泥棒が彼女のうちの鸚鵡を今にも盗んで行きさうになつたといふ」。そして、この鸚鵡は泥棒の言葉を覚えてしまったのである。「その日の夕方になつて、鸚鵡は籠といつしよに近所の小鳥屋に売り払はれた。」

紙や表紙のこと

本・2号・pp.7～9・6月30日(6月25日)・江川書房・江川正之・40銭

\*本の装丁に関する好みを記す。また、井伏自身の著書については、『仕事部屋』の、風変わりな目次の組み方やデザインについて、「尊敬してゐる先輩に筆誅を加へられたこと」、これまで「私」の本の装丁については裕伊之助、中川一政によつて装丁してもらつて運がいいと思つてゐることなどを記す。

7月

<無題>

ベースボール・4巻7号(7月号)・p.62・7月1日(6月12日)・ベースボール社・鷺津与四二・60銭

銀座の酒場「ジュンコー」の広告文。佐藤嗣男「井伏鱒二と遊び歌」(『文学と教育』141号・1987年7月25日)に紹介されている。\*「蛙は水よりも重く／鱒は水よりも軽し／酒は水よりも濃し」以上全文。

架空動物譜＝随筆＝ ⑨ [4.33]

文芸春秋・11年7号(7月号)・pp.17～19・7月1日(6月18日)・文芸春秋社・小峰八

郎・50銭

『田園記』（作品社・昭和9年5月15日）に初収録。『田園記』所収本文末尾には「（八年一月）」とある。

ユキコ＝創作＝ [3.16]

文芸春秋・11年7号（7月号）・pp.364～370・7月1日（6月18日）・文芸春秋社・小峰  
八郎・50銭

挿画・中川一政。『逃亡記』（改造社・昭和9年4月20日）に初収録。\*「従兄弟の庸一はまだ独身であるが、彼のところには、彼の表現にしたがふと『震災で拾った尋常三年生』の女の子がある。」震災の日の夕暮れ近く、身寄りを失ってしまったらしいユキコと名乗る女の子と会う。庸一は、ユキコの自宅があったところの焼け跡を尋ね、身寄りも探すが、複雑な家庭の事情があるらしく、結局見つけられないままに終わる。「けれどこの女の子は、いつまでも尋常三年生ではなくて、もう今では女学校も卒業して、庸一は彼女に婿さんを見つけてやろうと一生懸命になつてゐる。」

埋草用原稿＝Poets Essayists Novelistsクラブ＝

作品・4巻7号（39号・7月号）・pp.88～89・7月1日（6月22日）・作品社・駒沢文一  
・35銭

目次には欄名として「ペン・クラブ」とある。\*「築地座上演の小山祐士氏作『十二月』は幕切れになつても絶対に拍子木のたたけさうにない結末の舞台面であつたが、甘美で新鮮な台詞の充満してゐる芝居であつたと思ふ。」「この一座のリーダーである友田恭助は学生時代に私と同じクラスで、彼はそのころから『わかもの座』といふ劇団を組織してゐた。」その「わかもの座」の思い出を綴る。

マリについて＝青葉の下のベンチで（茶話）＝ ⑨ [5]

新潮・30年7号（7月号）・pp.39～41・7月1日（6月23日）・新潮社・中根駒十郎・50  
銭

目次の欄名は「青葉の下で」。「マリといふ犬」と改題して『肩車』（野田書房・昭和11年4月5日）に初収録。『肩車』所収本文末尾には「（八年五月）」とある。

<無題>＝作家の言ひ分＝ \*アンケート回答

作家・1巻1号（7月創刊号）・p.42・7月1日（6月25日）・アキラ書房・明松次郎・40  
銭

本文標題の脇に「左記に掲げるのは『作家の言ひ分』なる題下に、批評へ、ディナリズムへ、世間又は個人へ対し、作家としての悦び、不満、或は自作についての種々なる感懐等をお尋ねしたのに対し、諸家の寄せられたる御回答です。」と内容の説明がある。\*「こないだ友人月船君が小説の書けるやうになる秘薬を教

へてやろうと言つて、四種の薬草を煎じて飲ましてくれたが、小説は書けなかった。無駄なことをしてくれたものだとか或る人に話したところ、文学論だつてその薬草と同じことだとその人は私に反駁するのであつた(。)'『議論』と『言ひ分』との対立を示すアレゴリイともなうかと思ふ。」以上井伏回答全文。

解説的日記＝作家の一日＝

文芸首都・1巻7号(7月号)・pp.4～5・7月1日(6月28日)・文学クオタリイ社・保高德蔵・30銭

井伏の肖像写真一葉を掲載。\*「六月四日」の日記。「保高氏は文芸首都七月号に日記文を書けと言つた。ついでに写真も載せるから一枚よこせと言つた。」写真は、「大正九年の夏、私が青島に遊びに行つてゐたとき、荒川君といふ肺病の人が撮影してくれたものである。」その時の思い出を綴る。

経緯 [3]

経済往来・8巻8号(夏季増刊新作三十三人集)・pp.315～326・7月5日(6月29日)・日本評論社・中目尚義(鈴木利貞)・1円

文芸復興叢書『逃亡記』(改造社・昭和9年4月20日)に初収録。本文末尾に「(完)」とある。\*「もと府会議員崎田松五郎氏は六十一歳の老人であるが、せんだつて町内の榮楽社といふ結婚媒介所の紹介で、女中とも女房とも区別のつかない婦人を家庭に連れ込むについて、この老人は今年五十八歳だといふことに年齢を改正したさうである。」「相手の婦人が、結婚と同様な支度をして老人のうちに」、信一という「先夫の子の腕白ざかりの子供」と一緒にやってくる。一同の記念写真を撮り、会食が始まる。その間に、信一は、雨の中を屋敷から抜け出す。養女の可子が後を追いかけるが姿を見失ってしまう。やがて、信一は彼女の前に姿を現わす。「可子の決心してゐたことは後も真似たいと思つてゐるがらにほかならなかつたといふいきさは、彼女が水かさの増えてゐる川にとび込んだとき、彼もつづいてその水面を目がけてとび込んだ顛末を割り切つてくれるだらう。」

釣鐘の音に関する研究＝随想＝

あらくれ・6号(7月号)・pp.19～20・7月5日(7月1日)・秋声会・徳田一穂・15銭

本文冒頭には「3」とあるが、目次には「釣鐘の音に関する研究 4」とある。本文末尾に「(この章つゞく)」とある。\*「青森県津軽の人が青森県のお寺の鐘について書いてみないかといふので、ではさういふことにしませうと私はその用意をした。用意といふのは、『津軽むがしこ集』『老嫗物語』ならびに津軽地方の物語を集めた書物や津軽言葉の辞林などを読んで、およそこの地方の風土人情を知らうとすることなのである。」これらの内容についての紹介と感想。

夏の狐＝郷土の夏(2)＝ ⑨ [4.18.26.33.41.54.74]

『田園記』（作品社・昭和9年5月15日）に初収録。『田園記』所収本文末尾には「（八年七月）」とある。

## 8月

刀についての覚書＝小説＝

若草・9巻8号（8月号）・pp.10～15・8月1日（7月10日）・宝文館・大葉久治・25銭  
総ルビ。＊「せんだつて私は郷里に帰つて、私のうちの倉の二階で浅五郎といふ昔の賭博うちの所持してゐた刀を見つけた。」無銘であつたが、鞘の下げ緒のところに結わえられた紙縊を広げると、「浅五郎こと数名の子分の者を引きつれて来訪の際、金二両の抵当としてあづかる浅五郎所持の刀なり。別に書類これあり。寛政二年八月十六日」とあつた。「別に書類これあり」という別の書類というのは、「借用証書をはじめ浅五郎に関する記録や寛政二年における百姓一揆の顛末を記した書類であつた。それによると浅五郎といふ男は子分二十名を養つてこの界限で賭博うち渡生をしてゐた一種の侠客で、寛政二年の大洪水のとき農民一揆を指導した張本人である。」「この記録を書いた私の先祖のものは、おそらく百姓一揆の騒動や浅五郎の活躍ぶりに度胆をぬかれ、興奮してことこまやかに記録したものに相違ない。」その記録を紹介しつつ、寛政二年の一揆の様相を記す。「私はこの刀を絶対に秘蔵するといふ名目のもとに、誰にも内証にして、東京に持つて来た。」ところが、「友人の内ヶ崎伍一郎にそそのかされてその刀を古骨董屋へ売りに行つた。」その金で「私は伍一郎と奥多摩へ旅行に出て、ただいまその奥多摩のみすばらしい旅館の一室に伍一郎といつしよに泊つてゐる。さうして売りとばした浅五郎の脇差について、かういふ覚書をしたためてゐるわけである。」

狂人――一つの噺話――＝創作特輯十六篇＝

新潮・30年9号（9月号）・別pp.114～121・8月19日（7月18日）・新潮社・中根駒十郎・60銭

本文末尾に「（完）」とある。本号は9月号であるが、上記のように発行日付は8月19日となっている。＊「かねがね彼は家賃の安い大きな家に住みたいと希望してゐたが、彼の引越して行つた今度の家といふのは、庭ばかり無暗に広くて家は小さかつた。」「最も意外であつたことには、彼が引越して行つて荷物を家のなかに運び込もうとすると、もうこの家には一人の老婦人が住んでゐて、お前は何をしに来たかと彼を叱りつけた。」この老婦人というのは、貸家の家つき女中で、「以前その家に住んでゐた家族が夜逃げをする際、置き去りにされた老婆だといふ。」家主の話によると、「彼女の主人がきつと帰つて来るにちがひないと頑強に信じてゐて、三十年も前から大事に奉公して来た主人の留守中に立退くことはできないと主張するといふことであつた。」その日、彼は家主と交渉したが、結

局、家賃を二割引きにすることで決着した。ところが、家つき女中は、彼の前で奇矯な行動に及ぶ。家つき女中の主人は、「家主の経営する土地会社の積立金をすっかり拐帯して行方不明になったといふことである。置き去りにされた女中はそれと同時に幾らか気が狂つてもう十年近くもそのままになつてゐる。」翌日、問題の家つき女中が夜逃げしたが、彼の荷物はそのままになっており、「当然のこと彼がその家に住んでもさしつかへないと家主も承諾してくれたのである。」

山小屋の番人（一） ⑨ [4. 18. 26. 33. 39. 46]

東京日日新聞朝刊・20488号・7面・8月21日

翌日に続載。『田園記』（作品社・昭和9年5月15日）に初収録。『田園記』所収本文末尾には、「（八年九月）」とある。

山小屋の番人（二）

東京日日新聞朝刊・20489号・8面・8月22日

本文末尾に「（をはり）」とある。

9月

「にんじん」＝新刊批評＝

作品・4巻9号（41号・9月号）・p. 136・9月1日（8月20日）・作品社・駒沢文一・40  
銭

目次には「新刊批評」とのみある。＊白水社刊、岸田国土訳のルナール『にんじん』の批評。「苦渋な伝記がのびのびと書かれてゐて（これは寧ろこつこつと刻明に書かれた結果であらう）さうして予念のないお洒落な作品であつた。」

青龍社見学＝秋季展覧会諸相＝

中央美術・復興3号・pp. 79～80・9月1日（8月25日）・中央美術刊行会・田口掬汀（春日剛）・1円

＊川端龍子の「太平洋」、「山葡萄」、川端の芸術観についての感想。「在来の考へかたによると力を用ひずしてアメツチを動かすものは芸術であつたが、この『太平洋』（絹本、竪十尺、幅十二尺）の大作の前に低徊して私自身の古風な考へかた自体を吟味して、もの思ひに耽ることができたのはこのごろ爽快な出来ごとであつた。」芸術のための芸術は人生のための芸術ではないといった趣旨のことを川端氏が述べているのは、「私」は理解に苦しむ。「『その特技としての画業にたゞその特技者たる自分を守り、その芸術を守りそれを以て画業の本分と心得る』ことは誤りであると川端氏はいつてゐるが、『特技としての画業にたゞその特技者たる自分を守る』ことは決して『その芸術を守る』ことではない。したがつてそれをもつて『画業の本分と心得る』べきではなくて、『その芸術を守る』



ことは技術を守ること、常に趣きを別箇にしてゐるのである。」

<無題>=理想の造本= \*アンケート回答

本・3号・pp.14~15・9月4日(8月30日)・江川書房・江川正之・50銭

本文標題脇に「―― 経済的な制限が全くない場合の理想の造本案 ―」に就いて左の諸家よりお答へを得ました。然しこれは誠に汗顔に堪へぬ愚問でした。余りに空漠とした問題でしたから。／(編輯者)」とある。\*「普通の大きさの判で普通の活字で、誰が見てもこれは普通だと思ふやうな本が私の好みであります。しかし純粹に普通な本は、なかなか見つかりません。」以上井伏回答全文。

栗の木

帝国大学新聞・493号・7面・9月18日

本文末尾に「(九・一四)」とある。パラルビ。\*「私がこの町内(もと下井草といふ村であつたが最近のこと杉並区清水町と改正)に移つて来てから、今年の秋でちやうど満七年になる。」その引越してきた当時の田園風景とよぶに相応しい周囲の様子や、結婚したての頃のこと、また庭に栗の木が一本育つたことなどを記す。

船つき場・海・海坊主(一)

東京日日新聞朝刊・20520号・14面・9月22日

23日、26日に続いて掲載。パラルビ。\*「こないだ私は糸崎といふ海岸町に行つたとき、なにか安値で面白いことはないかと心がけてゐたが、その糸崎港からさほど遠くない大島上島といふ島の木の江といふ船つき場に海坊主が出るとの噂をきゝこんで、私もそれを見に行くことにした。」「私は海坊主など出るといふ現象を信じるものではないが、さういふ古風な怪物が出ると取り沙汰されてゐる時代おくれの風儀が気にいつて、よしんば大うそでも海坊主の出る噂を実地に確かめることは、私自身の主義主張に忠実なことであると自認した。」「私」は貸し船を一艘雇ひ、一週間の予定で「海坊主の正体を見とゞけに出かけたのである。」のんびりと目的の大島上島木の江という港を目指した。この頃瀬戸内海の島々では不景氣挽回のために、遊覧客を呼び寄せようと趣向を凝らすようになっている。「海坊主の出るといふ噂も、或は不景氣挽回策のための宣伝ではないかと思はれたが、棧橋でさよりの群をすくつてゐた男のいふにはまさか海坊主が出るといつてはお客も無氣味がつて寄りつかないだらう。いづれにしてもこんなに月夜の晩には海坊主は出る筈がないといふのであつた。」大きな汽船が島陰から姿を現わし、船頭はおちょろ船について説明した。「これは不況対策の催しごとではなくて、この土地の昔からの風俗だといふことである。」「たうとう私は海坊主を見なかつた。」

船つき場・海・海坊主(二)

東京日日新聞朝刊・20521号・14面・9月23日

船つき場・海・海坊主（三）

東京日日新聞朝刊・20523号・14面・9月26日

本文末尾に「（完）」とある。

10月

田園記 ⑨ [4. 18. 21. 22. 26. 30. 34. 54]

文学界・1巻1号（10月創刊号）・pp. 139～143・10月1日（9月12日）・文化公論社・

田中直一・35銭

『田園記』（作品社・昭和9年5月15日）に初収録。『田園記』所収本文末尾には「（八年九月）」とある。なお、『作品』11号（2巻3号・昭和6年3月1日）初出の同題「田園記」とは別文。

九月三日＝昨日の日記＝

文芸通信・1巻1号（10月創刊号）・p. 17・10月1日（9月15日）・文芸春秋社・菊池武憲・15銭

\*「旅行に出て十九日目である。今日は大阪駅前の旅館朝五時半に目がさめた。」から始まる、「九月三日」付の日記。

夏日舟遊＝創作＝ [12]

行動・＜1巻1号＞（創刊号）・pp. 98～108・10月1日（9月18日）・紀伊国屋出版部・豊田三郎・25銭

『禁礼』（竹村書房・昭和14年3月20日）に初収録。本文の始まる前に「第一日」とある。\*「密漁の打瀬網を引く船は一般にトロール船といはれてゐて、もしも見つかつて警察に引渡されると船も網も没収されてしまふことになつてゐるが、この船はすばらしく船足が軽くて乗つてゐて気持ちがいい。私は瀬戸内海の幾つもの島を探検するつもりで漁師の親分から一艘のトロール船を借りうけ、漁師の子の十五歳から十七歳までになるのを七名ほど引率して、この船に乗り二週間の予定で出帆した。」少年たちの航海での活躍ぶりが描かれる。

<無題>＝創作批評に対する感想＝ \*アンケート回答

新潮・30年10号（10月号）・p. 18・10月1日（9月18日）・新潮社・中根駒十郎・50銭

\*「創作批評は存在してよろしいと信じます。芸術品を鑑賞するときには当然、所有欲と批判したい気持とが起る。もし他愛ない批評文が現はれたとしても、決して文学は毒されなれないと思ひます。」以上井伏回答全文。

山口蓬春氏と語る＝画家と文士の一問一答録＝

新潮・30年10号（10月号）・pp. 117～121・10月1日（9月18日）・新潮社・中根駒十

郎・50銭

\*多くの場合、生活するために画家になろうとするので、おしゃべりをしてぼろを出すよりも黙ってる方が賢いと考えている日本画家が多数を占めることになる、と山口蓬春氏は言う。逆に「私」の趣味について尋ねられ、陶器の話などに及ぶ。

#### 道づれの集金人

大阪朝日新聞朝刊・18646号・4面・10月1日

挿画・栗原信。パラルビ。本文末尾に「(終)」とある。\*「大阪駅の構内にひとりしよんぼり立つてゐると」、「私」はいきなり声をかけられて驚く。声をかけてきたのは、「私」が十四年前に下宿していた栄修館の親父さんであった。彼は、「下宿組合の代表者として集金に出張した」というのである。「彼は私がもしも漠然と関西旅行に出て来たのなら、彼と一緒に十二番さんの郷里に行ってみないかといつて私を勧誘した。」山陽本線を降りてバスの終点にまで行くと、十二番さんの故郷だったが、予想していたような風光明媚な土地ではなく、侘びしげな村落であった。往還には人だかりがして、聞けば、村長派と反村長派との争いで、反村長派の計略によって村長が警察に連行されるところだという。栄修館の親父さんは、気後れを口にしながらも、「決定的な歩調で、十二番さんの家の方角に歩きだしたのである。」この下宿代集金のエピソードは、のちに「集金旅行」(『文芸春秋』13年5号・昭和10年5月などに掲載)にも描かれるものであるが、村長と反村長派との争いは、「私自身の問題」(『人物評論』1年9号・昭和8年11月)、「流行語について」(『大阪毎日新聞』朝刊・18424号・昭和9年8月15日)などでも触れられている。

#### <無題> \*アンケート回答

時事新報朝刊・18407号・5面・10月30日

「秋の味覚」と題するアンケートで、その項目は「一、秋になって楽しみな食べもの／二、諸国名物中一番美味だったもの」の二項目。\*「一、いちゞく、柿、まつたけ等、すべて秋の果物。／二、とりわけ美味だったといふものは存じません。」井伏回答全文。

11月

私自身の問題＝文化技術家の生活問題＝

人物評論・1年9号(11月号)・pp.117～118・11月1日(10月18日)・人物評論社・宮島正男・30銭

表紙には「大宅壮一編輯」とうたわれているが、奥付には「発行編輯兼印刷人」として宮島正男の名前が掲げられている。「作家」という肩書きが本文著者名の上に記されている。\*「私自身についていつてみると、生活の不安は今にはじま

ったことではなくて以前の学生時代から、一例をあげてみれば葛西善蔵氏の身辺記に類するものを読んだだけでも、未来のことが身にしみて不安であつたやうな次第で、実際に自活の方法をとらうとすることになつてからは更に身にしみて、不安といふだけではなく困却に直面したわけである。」「これ以上に酷い不況が打ちつゞくものとすれば、私は原稿を書いてどうにかするいふ暮らしを打ちきり、べつな生計方法を見つけて原稿を書いて行かなければならないと決心してゐる。反つてさうなる事は私の見聞を拡張することにも役立つだらうと思はれるので、かねがね私もべつな生活の方法を発見しようと考えてはゐるが、なかなか見つからない。」「田舎のアニキ」に牧畜をしたいと言ったり、出版をしたいと言ってみたりしたが、いずれも反対された。「いま非常時時代に当面してゐるのにもかゝらず、それについていかめしい論調の一家言を述べないのは、どこことなく恰好のつかない感じであるが私の生活の輪廓だけはこれで告白できてゐるつもりである。」

或る部落の話＝創作＝ [3]

中央公論・48年11号（11月号）・創作pp.112～131・11月1日（10月18日）・中央公論社・牧野武夫・80銭

本文末尾に「（完）」とある。文芸復興叢書『逃亡記』（改造社・昭和9年4月20日）に初収録。\*「沼隈の平家村」に行ったまま帰って来ない洋之助の両親に、彼と同行した「私」が事情説明のために記した手紙の形式を採った作品。「ご存じの通り令息洋之助君の今度の旅行は、学校のレポートを書くため史跡の实地調査がその目的でありましたが、旅行さきから今だに消息もなく、いつ帰るとも予想のつかないのは、洋之助君と私とが同道で出かけて行つた沼隈の平家村といふ部落において、その部落のミスズと申す一人の少女から洋之助君が深く恋慕されたからであります。」「私は特別に辺鄙な田舎を好んでゐるといふわけではありませんが、たまたま今年の夏、或る通俗な趣味雑誌で『仙境さまざま』といふ旅行記事を読み、なるほどさまざまな仙境がまだ内地にもあるやうだが機会があつたら是非とも行つてみたいと思つてゐた矢さきへ、令息洋之助君が私のうちに遊び来て、洋之助君もこの夏は避暑を兼ね学校のレポートの材料を集めにどこか思ひきつて辺鄙な山のなかに行きたいとのことで私たち忽ち相談がまとまり、『仙境さまざま』の記事のうちで気に入らうな仙境を一つ選定して同道で出かけることにしたのです。」その世間と隔絶した暮らし振りや人情を交えながら、洋之助がその地にとどまるに至った経緯を記す。なお、この作品のモデルになったのは、「軋の津とその付近」（『旅と伝説』1年7号・昭和3年7月1日）において言及されている地であると思われる。

12月

旅さきの妄執＝随筆＝

モダン日本・4巻12号（12月号）・pp. 22～23・12月1日（11月5日）・モダン日本社・大島啓司・20銭

総ルビ。\*「私」は、旅疲れなど感じた時には、「好色の徴候が顕著なのを感じる。」旅先で美人に出会ったときがそうで、たとえば木曾福島で雷鳥の丸焼きを出されたときには、給仕の女中に気を引かれて、とうとう食べなかった。「けれど旅疲れのときの私の嗜好は、必ずしも好色といふことにだけ集中されるのではない。」この前も瀬戸内海の小さな島に行って、その祠に観音像があるのを発見した。盗んでやろうかとも考えたが、旅疲れのせいだろうと思って、そのまま置いてきた。「けれどこの仏像と木曾福島の雷鳥の丸焼きとは、今でもその魅惑が忘られない。」

老婆の言葉＝私が占ひに観て貰った時＝

文芸通信・1巻3号（12月号）・p. 10・12月1日（11月15日）・文芸春秋社・菊池武憲・15銭

\*「大正八年（？）江戸川の辻で占ってもらったときには『巨万の富をのこす』とのことで、一昨年同じ場所で同じ占ひ師にみてもらふと『生活赤貧で暮らす』とのことでありました。その占ひ師は背のひくい老婆であります。」

いかさま病院 ⑨ [4]

文芸・1巻2号（12月号）・pp. 58～63・12月1日（11月18日）・改造社・山本三生・50銭

本文末尾に「（十一月一日）」とある。『田園記』（作品社・昭和9年5月15日）に初収録。『田園記』所収本文末尾に「八年十一月一日」とある。\*「今年の早春、私は風邪発熱から病名不明の熱病を併発させて、いまにも死にさうになった。」近所の医者のお勧めで、その医者の経営する巣鴨の診療所に入院した。ようやく、徐々に熱も下がり一箇月で退院したが、その間に河上徹太郎や田中貢太郎が見舞いに来てくれた。しかし、「私が退院して数箇月たつてから都下の各新聞に、この病院の副院長をはじめ二名の医者は賈の医者で院長は三台の寝台自動車を盗んで売りどばしたといふ記事が発表された」。「無免許病院」だったのである。

平野屋の蒙った被害（上） [5. 19. 25]

報知新聞朝刊・20449号・5面・12月8日

10日まで3回連載。パラルビ。『肩車』（昭和11年4月5日）に初収録。\*「昨年の十二月、私はある新聞の日曜付録欄にコントを発表して、近所の平野屋酒店にとんでもない迷惑をかけた。私が取消しの文章をどこかに発表しないかぎり一年後の今日でも平野屋は困るといふのである。」「そのコントは平野屋酒店の五つになる子供がトラックに轢かれて大怪我したときのことを素材にしたものである。平野屋のおかみさんは近くの薬屋から繃帯を買って来たが、薬屋は平野屋に酒代の借金をためてあるので、平野屋はそれと差引き勘定のつもりで繃帯の代金を払

はなかった。」繻帯代を差し引いても、酒代はまだよほどたまっているというので、それでは繻帯以外の石鹸や化粧品なども貰って来ればよい、と「私」が冗談に平野屋に言うと、平野屋は、そんなことをすれば互いに意地になって、始末がつかなくなるだろうと言う。「私はこの話に人間の生きて行かうとする意欲と味はひとがこもつてゐると考へたので、それを素材にして平野屋酒店と薬屋とがお互に競争で相手の店から商品を取りよせるといふ筋書に仕組み、その結果は平野屋と薬屋とが過分に派手な暮らしをするといふ物語にした。」このことで、平野屋は、派手な化粧をしたと書かれた女房が不憫だと言い、また、田舎の実家に借金を申し込んだところ、このコントが事実と受け取られて閉口したという。平野屋は、トラックが店に飛び込んだり、泥棒に入られたり、不連続きなのである。なお、本文中に「昨年の十二月、私はある新聞の日曜付録欄にコントを発表して」云々とあるが、これに該当するのは、管見の限りでは、「二軒の小売商人が派手な暮らしをする話（2000字コント）」（『大阪毎日新聞』朝刊・17317号・昭和6年7月22日）しか見あたらない。

#### 平野屋の蒙った被害（中）

報知新聞朝刊・20450号・5面・12月9日

#### 平野屋の蒙った被害（下）

報知新聞朝刊・20451号・5面・12月10日

#### 信号（1） [3]

東京日日新聞夕刊・20602号・1面・12月14日（12月13日）

挿画・太田三郎。原則的に月曜付けの紙面は休載（実際の発行日では日曜日休載）しながら、30日まで11回連載。30日のみ朝刊に掲載。「森」と改題して文芸復興叢書『逃亡記』（改造社・昭和9年4月20日）に初収録。12月13日付け夕刊第一面に「次の小説／短篇『信号』／明日から／井伏鱒二氏／挿絵 太田三郎氏」と題し、井伏鱒二と太田三郎の写真を掲げた予告記事がある。そこには、「高級読み物として前後二回、五百数十回にわたって読者を唸らせた田中貢太郎氏の『旋風時代』は今日で漸くその初篇を終ることにになりました、この深い感銘のあと、年内の十日間ばかりを新人井伏鱒二氏の珠玉のやうな短篇『信号』をもって飾ります、画は太田三郎画伯です、明日からの紙面に御期待下さい（写真右、井伏氏、左、太田氏）」とある。パラルビ。＊「最近まで私は毎週水曜日の午後、村山貯水池付近の森のなかでピストルを撃つ練習をしてゐた。」村山貯水池で、貯水池の番人に釣り泥棒をしていた連中だと誤解された「私」は、やむなくその連中と森の中に逃げ込んだところ、そこで石地蔵を的に射撃の練習をしていた旧家の青年たちと出会う。その青年は生粋の没落階級の一人として、自殺の練習をしているのだと説明する。それ以来、「私」は、青年の連れの令嬢と毎週水曜日に森の中で射撃の練習をする約束をしたのである。なお、初出紙の最後は、「しかし私はこのいきさつについて述べるわけには行かなくなつた。年末多忙に際して読者

諸君はそれどころの話でもなからう、また私はこの物語に区切りをつけなくては  
いけなくなつたからである。」と結ばれている。

信号 (2)

東京日日新聞夕刊・20603号・1面・12月15日 (12月14日)

信号 (3)

東京日日新聞夕刊・20604号・1面・12月16日 (12月15日)

仏像愛玩の流行 (上) = 学芸 =

信濃毎日新聞朝刊・18523号・5面・12月16日

18日に続載 (17日には掲載せず)。パラルビ。\*「このごろは国粹主義発露のせ  
ひか古い仏像などを見つけ出して、それを売り買ひする趣味が流行してゐる。」  
なかには、田舎の由緒深い寺から仏像を盗み出して売り払おうとする例もあるよ  
うだ。有名な「ほら信」という人物は、博物館に盗みに入ったという。「私」は  
あるデパートで開かれた美術骨董品の即売会で、熱河の承德から出たという、頭  
だけ欠けた唐代の石像に感心した。ところが、「私」の友人の中野某氏に聞いて  
みると、それは熱河の承德によそから持ち込んだ偽物だろうという。嘆かわしい  
世相だが、このような風潮を正すのは難しいであろう。

信号 (4)

東京日日新聞夕刊・20605号・1面・12月17日 (12月16日)

仏像愛玩の流行 (下) = 学芸 =

信濃毎日新聞朝刊・18525号・5面・12月18日

信号 (5)

東京日日新聞夕刊・20607号・1面・12月19日 (12月18日)

信号 (6)

東京日日新聞夕刊・20608号・1面・12月20日 (12月19日)

信号 (7)

東京日日新聞夕刊・20610号・1面・12月22日 (12月21日)

12月21日付け夕刊第一面には「御注意 小説『信号』本日休載」とある。

信号 (8)

東京日日新聞夕刊・20614号・1面・12月26日 (12月25日)

12月23日付け夕刊、24日付け夕刊各第一面には「御注意 小説『信号』本日休載」  
とある。

信号 (9)

東京日日新聞夕刊・20616号・1面・12月28日 (12月27日)

12月27日付け夕刊第一面に「小説『信号』本日休載」とある。

信号 (10)

東京日日新聞夕刊・20617号・1面・12月29日 (12月28日)

信号 (11)

東京日日新聞朝刊・20618号・8面・12月30日

12月30日付け夕刊第一面「社告」に、「本号を以て年内夕刊は最後と致しますので小説『信号』は卅日付朝刊に、講談『血煙天明陣』は卅一日より朝刊に掲載致します」とある。

燕の巣?

レツェンゾ?・12月?

瀬尾政記『井伏鱒二著作目録稿』(瀬尾瓊子・1988年5月24日)による。

蠟人形・くりすます・誌上・ぶれぜんと? \*アンケート回答?

蠟人形?・4巻12号?・12月?

瀬尾政記『井伏鱒二著作目録稿』(瀬尾瓊子・1988年5月24日)による。

[参考]

辛うじて終電車に乗る井伏鱒二氏=春の夜は更けて十景(8) =

文学時代・4巻4号・p.12 (口絵)・昭和7年4月1日

井伏の写真に次のような文章が付されている。「もうこれで何度目かの禁酒宣言をした井伏氏、でも今度は本当に、本当に、止めたとおつしやる。で、今や終電車に辛うじて間にあつて、階段を急ぎ上つて行く氏の姿をカメラに収めたら『君、絶対に飲んでたんぢやないよ。酒を飲んで夜更かししてたなんて書いちや駄目だよ。見給へ、酔払つてゐないだらう。今夜は『作品』の会に出たんだ。人類は真面目になつたよ君』お酒よお酒よ。井伏氏を誘惑する勿れ。」